

CHOISIR *36*



新泰川製菓
加藤吉村女社長
1994. 9. 14
受入書

CHOISIR

CONTENTS

特集 産む・産まない 道楽にしては肩の荷が重い、子育て	小口谷子	1
超やおい少女への道 あねいはやおい少女私見	野火ノビタ	22
わかってくれとは言わないが、そんなに俺らが悪いのか？	玄田生	28
やおい論争 コミケ参上っ	色川奈緒	34
La VOIX de CHOISIR		36

特集

産む 産まない

前号で女性読者の皆様だけにアンケートを送らせていただきました。以下に寄せられた回答をご紹介します。いろいろ細かい書き込みをしてくださってありがとうございました。紙面の都合で全部は紹介できません。ご了承ください。

その前に、お詫びしなければならぬことがあります。まず、回答してくださった方の中で、アンケートが片面しか印刷されているものがありました。匿名で戻してくださったので連絡がとれなかったのです。せつかく回答してくださったのに、ごめんなさい。書き込んでくださった分は、以下の集計結果に使わせていただきました。

それから！Ⅲ-6の設問で「優生保護法によって定められた疾病が胎児にある場合、中絶が認められている」となっているのは、事実誤認でした。産む側の女性が優生保護法に掲げられた疾患にかかっている場合は、「その者に対して、その疾患の遺伝を防止するため優生手術を行うことが公益上必要であると認めるとき」は、中絶が認められている、というものでした。申し訳ありません。四年くらい前にちょっと「運動」してた記憶を頼りにしちやダメだな、と反省しております。

さて、アンケートの結果をもっと細かく見ていくたらよかったです。いろんな立場・考え方の方がお答えくださったのを、うまくまとめられませんでした。力不足をお許してください。いろんな意見・考えがあること、そのままの形でご紹介しますが、いろいろ考えるきっかけには十分なると思っています。これだけの数の、メンドーな質問に、丁寧に回答してくださった皆様、本当にありがとうございます。

(色)

I あなたについて

- 1 何十才代ですか。
②20代=7人 ③30代=11人 ④40代=3人
- 2 パートナーがいますか？
①いる=9人 ②いない=10人 △=1人
該等なし=1人
・セックスにおける特定の相手という意味では①だが、それ以上でもそれ以下でもない
ので、「パートナー」とは呼べない。(20代)
- 3 2で①と答えた方、パートナーは異性ですか同性ですか。
①異性=10人 ・とりあえず①。 ②同性=2人
- 4 いまの暮らしの形態は、どれにあたりますか？
①法律婚=2 ②事実婚=1人 ③ペーパー離婚=1人
④一人暮らし=9人
⑤親と同居=5人 ⑥同性パートナーと同居=1人 ⑦ルームメイトと同居=1人
⑧その他=2人 ・娘と同居 ・異性と同居
- 5 仕事をしていますか？
①している=15人
①の方、内容と形態、だいたいの年収をお教えてください。 省略
②していない=5人
- 6 子どもがいますか？
①いる=6人 ②いない=15人
①と答えた方、次のどちらですか？
③自分で産んだ=6人 ・自分で産んだが、別居。(40代)
④自分で産んだのではないが育てている=0人
- 7 5で①と答えた方へ。
 - 1) 何人いますか。
「1人」=3人 「2人」=3人
 - 2) 人数・間隔を計画的に産みましたか。
「はい」=2人 「いいえ」=3人
 - 3) 子どもがいないほうが良いと思うことがありますか。あるとしたら、どんな時ですか。
・ごくまれにある。一人になりたい時。(30代)
・自分のやりたいことが、ままならない時。(30代)
・今は(子ども15歳)思わないけれど、幼い時は手がかかり(当たり前だけど)、いないほうが良いと思ったこと、数知れず。(40代)
・一人が気楽。疲れない。(40代)
・ある。子どもにイライラすることがよくある。いないほうが静かでよい。セックスだって、邪魔されない。(40代)
- 8 5で②と答えた方へ。
 - 1) いずれ、産みたいと考えていらっしゃいますか。
①いつかは産みたい=7人
・②③④ではないという程度。あまり固執していない。(30代)
・まったくないとも言い切れないが、いつかは…とも思わない。できないかもしれないし。
(30代)
②計画中=0人 ③妊娠中=0人

④産むつもりはまったくない=6人

- ・万が一妊娠したら、産むかもしれない。(20代)
- ・できたら産みたいという気もするが、意図的につくりたいとは思わない。子どもは欲しいという気持ちはあるが、男と関係がないのと、お金がないので、できない。(30代)

⑤わからない=2人

- ・わからない。産みたいと思うようになるかもしれない。でも、今のままなら産まない。(20代)

- ・なりゆき(条件が整えば、しかし、必ずしも産むことにはこだわらない)。(30代)

2) 過去に産みたいと思ったことはありますか。もしあるとすれば、その時、産まなかったのはなぜですか。

- ・妊娠しなかったから。(20代)
- ・女同士じゃ無理だから。(20代)
- ・お金がないから。(20代)
- ・瞬間的に思ったことはあるが、その気持ちは続かない。(20代)
- ・いろいろ。やりたいことができなくなる。「母」役割固定はいやだ。(30代)
- ・ある。相手の男性がとても手に届かない人(夢と現実のあいだにいるような人)だから。(30代)
- ・普通に結婚して、とうぜん子どもを産むだろうと思いましたが、べつに結婚する気はありませんでした。これからもし結婚しても、もう産みたいと思いません。たぶん結婚もしないだろうし……。 (30代)
- ・産みたいとは思わなかったが、欲しいと思ったことはある。思った時にできてりゃ産んだかもね。けど、「昨日そう思った」「今日はもう思わない」なので、そもそもムリでしょう。(30代)

II 中絶について

1 現在、日本の医学界では妊娠22週以降の胎児が「いのち」とみなされています。それは、22週前の胎児が母体外で生存していた例があるためですが(優生保護法によって、胎児が母体外で生存できない場合は中絶が認められているため)、あなたは一人の人間の「いのち」はいつから始まるとお考えですか。

①受精の瞬間=8人 ②法律的に中絶が認められている22週より以降=5人

③誕生の瞬間=0人

④妊娠している当の女性が「いのち」だと認識した時=7人

- ・結論として④としか言いようがない(30代)。

⑤その他=1人

- ・医学界で見なされている「いのち」は、あくまで優生保護法解釈のための「いのち」です。尊重されるべき1個体の人間としての「いのち」のことではありません。私は前者としての「いのち」について考えるのは、中絶反対を意味するととらえており、後者の場合、そもそも「いのち」とはなんぞや、という問いかけに還元されてしまい、もともともなくなります。したがって、「わかりません」。(20代)

- ・①から「いのち」だとは思いますが、それは花や虫の「いのち」に通じるようなイメージ。愛着の度合が「人間のいのち」というのとは違うよう。自分に妊娠の経験がないので、従来、他人の子に関しては③の時に「人間のいのち」と認識してきたと思うが、妊娠している本人にとっては④なのだろうな、と思う。(30代)

— アンケートに「優生保護法によって定められた疾病が胎児にある場合、中絶が認められています」という誤った記述をしてしまいました。胎児に障害があつて中絶が行われる場合、それはどういうことを理由として行われているのでしょうか？

芦野 それはケース・バイ・ケースでしょう。「経済的理由」とされることもあるだろうし、「母体の健康」(を害するおそれがある)とされることもあると思います。ただ、胎児の障害が理由とされることは明らかですから、医師たちの間では、胎児条項があればすつきりするという見方がありますね。これといって具体的な動きは見せていないのですけれども。

海外では、けっこうあるんですよ。かなりの国が胎児条項というものを入れているんです。妊婦の健康に問題がある場合、強姦による妊娠の場合、と並列して胎児条項を入れる、とかね。

— 日本の「改悪」の動きは最近どうなっていますか？

芦野 法案の提出などは、ないみたいです。だけど、「生命尊重派」がビデオを作って学校にバラまいているという動き、あいかわらず続いているんですよ。とある県では、県の教育委員会が「生命尊重派」とコミットしていて、県下の学校にビデオを推薦し、なかば強制的に買わせている、ということもあるようです。

— 「産む・産まない」は女性が決めていると考えますか？

芦野 残念ですが、そうは言い切れないと思います。

まず第一に、望まない妊娠を防ぐ、ということができていませんものね。私はビルを許容範囲と考えているんですけど、というのは女性が自分で主体的にコントロールできる方法だという面から言っ

芦野由利子さんに聞く

ているのですが、とにかくもつと避妊の選択肢が多くほしいですね。女性が管理できて、安全性が高く、効果も高いもの。この安全性と効果が矛盾したりするから困るんですね。効果が高いと副作用が心配、ということがあつたりしますから。

ライフスタイルや環境に合わせて選択肢を変えられるようになるべきだと思うんです。この「環境」の中には相手の男性との関係といったことも含まれます。コンドームもきちんと使えばいいんですけど、やはり男まかせという面がありますから、いま現在ほんどの日本人がコンドームしか使用していないというのは、考えたいところですね。現状ではインフォームド・チョイスができないのですよ。チョイスがないわけですから。

二番目は、情報・教育・カウンセリングの問題。学校は性教育もおそまつなものですし、日本には家族計画クリニックとかウイメンズ・クリニックといったものがほとんどありません。ですから女性たちは雑誌や友人から情報を得ているわけですけれど、その情報は不確かであったり、確かであっても偏つていて包括的な情報ではない。きちんとした情報を得るといふことは大切だと思います。

自己決定権を行使できるかどうかというのは、環境整備にかかわってくることなんです。環境整備がなされていなければ、自己決定権は行使できない。その環境整備ということが、いま述べた、避妊の選択肢を増やすということと、情報・教育の充実、の二点です。

あとは、伝統的な価値観の問題がありますね。それと、法制度の問題。これらをすべて考えてみると、現状で女性が「産む・産まない」を決めているとは、言いたいと思います。

(聞き手・まとめ 色川)

2 中絶について、どちらの立場をとりますか。

①肯定・承認=20人 ・(情情的には②だけれど)全否定しきれない点で①。(30代)

②否定・不承認=0人

3 中絶は「いのち」を抹殺することだと思いますか。

①思う=12人 ・前問2の抵抗感の元は①。(30代)

・できなきゃ、今ごろ私は4人の子持ちさっ…。(30代)

②思わない=6人

③その他=3人

・回答不能。(30代)

・①>②。まったく思わないと言ったらウソになる気がするから。(30代)

・他人事としては①。あーサッパリしたっ!と思った(経験者談)→②。(30代)

ノーコメント=1人

4 2で①→3で①と答えた方、中絶を肯定するのはなぜですか。

①「いのち」であっても人間ではないから。=1人

②いま生きている女のいのちのほうが大切だから。=12人

③子どもを育てる条件が整っていないのなら産まないほうがいいから。=6人

・(いま生きている女の)「いのち」というか、生きること。(30代)

・子を産むことで母体の生命が危険なときと、強姦による妊娠などで、産み育てる意志がもてないときなど、産んでから殺したり捨てたりするくらいなら、やむを得ないのかな、とは思う。(30代)

④その他=7人

・産んだことを後悔するなら産まないほうが……。子どもは望まれて産まれてくるべき。(20代)

・いま生きている女の意志が大切。中絶の傷(体・精神的)を負うのは女自身以外の誰でもない。(20代)

・中絶はいのちの抹殺であることは客観的事実である。いのちを抹殺するのだから、当然、中絶は「悪」です。しかし、現在の社会的・技術的状况において、中絶は肯定せざるを得ません。中絶を禁止することは、女性を幸せにはしないからです(中絶を禁止することは、そういうイミでは「悪」です)。私は中絶を肯定します。しかし、肯定するのは、中絶そのものが善だからではないのです。普遍的な善ではない。私はそれをわかったうえで、中絶を選ぶのです。そういう態度が必要ではありませんか?(30代)

・産むか産まないかを決めるのは女性であるべきだし、女性の意志が一番だから。(30代)

・いま生きている女の「生活」のほうが大切だから。(30代)

・個人的に、子どもがキライだから。個々の子どもではなく、子どもという存在がキライ。(30代)

5 3で②と答えた方、中絶は「いのち」の抹殺でないとしたら、何だと考えますか。

・ガンをとるようなもの。(20代)

・生き方の選択。(20代)

・女の人生における選択のひとつ。(30代)

・ひとつの答えでくくるべきではない。(30代)

・私にとっては、おできとか、そーゆーのを取り除いただけ。→一般論は言えません。(30代)

・生命であるが、それを産む・誕生させることが必ずしも正しい選択とは思わない。産むことで女の性ばかりが負担を負う状況は厭。(40代)

・そのことは考えたくない。(40代)

6 中絶は法律でどう扱われるべきだと考えますか。

- ①いかなる理由であっても合法とすべき。=11人 ・女性が望めば。(30代)
- ②一定期間内(妊娠〇〇週以内、など)であれば無条件に合法として、その後は特別な理由に限り(妊婦の生命の危険、など)合法とすべき。=5人
・①だと思うけど、現実的な法律を考えると②。(30代)
- ③強姦や近親姦の場合は、全期間、合法とすべき。=3人
・まずは墮胎罪と優生保護法の撤廃!! ②の「特別に理由」に③も含まれると思う。(30代)
- ④その他=5人
・あくまで妊娠している女性の意志を尊重し、女性の体への安全性を考慮すべき。ひょっとして、①に近いのかな。でも「いかなる理由」というのも怖い気がします。(20代)
・①にしたいけど、①で受精の意見を最重視すべき。(20代)
・妊婦の意志にしたがって、合法。ただし、中絶することで起こりうる、妊婦の体の異変などについては、あらかじめ相談できること。(20代)
・妊婦本人の意思を最大尊重できるようにするべき。妊婦本人が決定権を持つようにする。(30代)
・基本的には法律で扱う問題ではないはず。扱うとすれば、女性の保護のためだけにのみ法規制が必要となるべきだ。「近代法」とは、倫理を扱うものではなく、必要最低限存在すべきものだから。(30代)
・わからない。法律で決められる(管理される)ことに抵抗はあるけれど、中絶はやっぱり「殺人」かな(上の「いのち」の問題とあわせて、今のところ、自分の中で曖昧なのですが)という気もするし、身体をいわずらに手術することへの抵抗感もあって、中絶野放ししているのも支持できない感じ。(30代)

7 子どもはどのような状況で産まれてくるべきと考えますか。

- ①産む女性に望まれているのなら、よい。=14人
- ②両親に望まれて産まれるべき。=2人
- ③産む女性の周囲の協力があるのなら、よい。=4人
- ④親子ともに、現在の日本の平均的生活水準が保てる経済的基盤があるべき。=5人
- ⑤なんとか食べていける程度の経済的基盤があればよい。=2人
- ⑥いかなる状況・条件においてもよい。=4人
- ⑦その他=4人
・まわりにかわいがられる状況、絶対に安心な状況=私の場合、こう産まれてきたい。(20代)
・②に越したことはないけれど……。理想としては⑥と思うけれど、現実的に、親に育てる意志がないような場合に、その産まれた子をサポートするようなシステムが十分とは思えないので。(30代)
・基本的には①だけど、②や③もあったほうが、子どもが生まれてから、その女性自身も子どもも楽だと思う。サポートしてくれる人が、それだけいることになるから。(30代)
・子どもが愛され、保護され、育てられる環境、状況が最低必要。(30代)
・「べき」と言われると困るが、産む女性が望んでいて、「相手」も望んでいて、周囲の協力もあり、経済的にもとりたてて問題ない、というのがBestでしょう。(30代)
・設問自体、ナンセンス。だって、子どもは状況を選ばず生まれる。(30代)

Ⅲ 「産む・産まないは女が決める」という言い方について

1 この言い方について、どう思いますか？

①異存なし=14人 ②異存あり=3人

無回答=2人

- ・よくわからない。ピンとこない。国家（法律）でなく個人が、という主張としてなら共感するところもある（個人差の多い問題—精神的にも身体的にも—を機械的に「22週」で区切ってしまうようなことに抵抗がある）けれど、「女が」というのはなじめない。(30代)
- ・あるともないとも言えない…。(30代)

①と答えた方は、理由もお聞かせください。

- ・異存というより、違和感。「スローガン」に対する違和感。(30代)
- ・そんなに簡単に言い切れない。(30代)
- ・ちょっと強がりに聞こえる。もちろん決めるのは女だけれど、どんな状況でも産めるよう、世の中を変えたい。(40代)

2 いまの日本で、この主張は必要だと思いますか？

①必要=17人

- ・必要・不必要と問われれば必要だが、好き・きらいと問われれば、きらい。(20代)

②必要ない=0人

無回答=2人

- ・「主張」=スローガンととらえるなら必要はないが、女から自らの意志に反して「産まされる」現実に直面したとき、「決めるのは私よ!!」と言える世の中であればよい、と思う。(30代)

3 2で①と答えた方、それはなぜですか。

①中絶の合法化のため。=7人

②墮胎罪を撤廃するため。=8人

- ・すなわち、中絶の合法化……にならないのでしょうか。(20代)
- ・男にとって不平等でもかまわない、と私は思う。(20代)

③男女平等を獲得するため。=4人

④その他=7人

- ・だって女性が産むんでしょ？ 男に決められては困る。(20代)
- ・子どもの養育負担がほとんど100パーセント母親と父親、その親族に負わせているから。(30代)
- ・女がもっと自由になるため。(30代)
- ・男や男社会が女性のからだを支配している限り、この主張は必要である。(30代)
- ・女のからだを女にとりもどすため。=自分のからだは自分のもの！(30代)
- ・今の不平等な社会で女が決めることは少ない。いろんなことを女が決めたい。(40代)
- ・産む・産まないの条件は何で決めるのか。妊娠期間が決めるものでない。状況・条件は常に流動的である。(40代)

無回答=1人

4 現在、産む・産まないを女性が決めていると思いますか。

①思う=2人

- ・女性だけが決めているとは思わないけれど、女性も決めている（女性自身の意志が大きく反映している）と思う。私の周囲の感じでは、最終的に本人（女）が決めていると思える（その決断に、パートナーや親戚や社会や法律が圧力となっていようと、圧力に屈するもの、それはそれで“意志”だと思うので）。(30代)

女性の自己決定権を阻むものが、大きく分けて二つあります。

まず、男の子を産まなくてはならない、ということ。これは、儒教的な意味合いなのですが、血のつながりのある直系の男子が家を継ぐことが重要なのです。祭祀(チエサ)——先祖の法事なのですが——、この担い手は男でなくてはならないとされているんですよ。家に男の子がいないと、その家はすたれると考えられていて、すたれるどころか、先祖に申し訳ないという罪の意識が強いんです。

だから、胎児が女の子だと中絶してしまふ、というのは当たり前のように行なわれていることです。

韓国ではまだ純潔主義が根強く残っていて、婚前交渉なんて公然とは語られていません。三〇代の既婚女性の中絶は、日常的な会話のなかで語られるものとしてあって、このギャップには驚かされます。女の子だから中絶した、というのは普通に語られちゃうんですよ。職場とかでも、道端でも。

二つ目に、コンドームの不在、ということが挙げられます。朝鮮戦争後の家族計画で、方法として不妊手術が選ばれたんですね。はじめは男性の側の手術としてあったんですけど、実際にする人がいなくて、——「去勢」の恐怖というのは強かったようですよ——急遽、女性の側の手術になったんです。「二人の子どもを持つたら不妊手

術を」というのがスローガンになってたんですよ。不妊手術をうけると、公団住宅に入る優先権がもらえる、とかね。そういう方法で、奇跡的に人口抑制を果たしたわけです。家族計画を女性の不妊手術とヤミ中絶で行なった問題は大きいですよ。

最近はずっと二人に抑えようという動きがあるんですけど、チエサの影響は強くて、子どもを一人か二人だけといった時に、その中に男の子がいなくてはならないわけですよ。長男が何かで死んでしまった時のことまで考えて、子どもは二人とも男の子にする人たちがいます。

韓国における 産む・産まない

田端かや

裕のある上流階級の女性たちで、再度、子どもが産めるように手術をしたい、ということなわけです。階級差が激しいところですから、ほんとに一部の人のことなんですけど、ニュースとして取上げられていましたね。

それと最近、不妊手術に殺到する四〇代の女性たちのことが新聞に載りました。彼女たちは、さきほど述べた家族計画のもとに、七〇年代に不妊手術をした、経済的余

女性の自己決定権という点、これも儒教の影響なんです。思想に関わる人を敬う傾向があるものですから、大学教授とか芸術家には子どもを産まない人もいて、それは認められているようなんです。それ以外の人には、子どもを持たないということは社会的な認められていません。

核家族化が進んでいるとは言え、実際は核家族とは言えない状況なんです。チエサでしょ、盆でしょ、親の還暦、子どもの満一歳の誕生日——盛大に行なうのです——、とにかく冠婚葬祭の行事がいっぱいあって、そのたびにすべての親族が集まるわけです。たとえば日本では私たちが知らないような「族」の人まで集まるわけで、毎週末のように何らかの行事があるから、その親族たちはとても親しいんです。でも、それはつまり、親族意識というものから離れることをとても難しくしているでしょ。

それに、こういう場での女性の役割は、とても旧態依然としたもので、男性より低い者として扱われてますからね。自己決定権という考え方自体、女性学を学問として学ぶ一部の人間たちだけのものです。現実には、まだまだといった感じです。

(談／まとめ＝色川)



②思わない＝10人

③その他＝7人

・私の友人たちに関して言えば①だが、全体のことはわからない。①とは言え、いろんな事情から、自由に決められるわけではない。(20代)

・「産まない」ほうは、まあできるが、「産む」ほうは、女一人では条件が厳しい。だから、「産まない」ほうがクローズアップされている。(30代)

・この質問には①か②では答えられないよ～。(30代)

・①になりつつある。(30代)

・①≦②。でも少しずつ決めている女性たちが出てきていると思うから。(30代)

・一般論として言えない。私は自分で決めた。(30代)

・幸運にも自分で決められる女もいるが、他人に強制されている女も多数いる。(40代)

5 産まないと女性が決める理由として、あなたが納得できるものは何ですか。

①健康面で妊娠・出産に問題がある。＝12人

②子どもを産むことが生き方・人生観に合わない。＝14人

③いずれは産みたいと思うが、いまはそれが最重要ではない。＝12人

④子どもを育てるだけの経済的余裕がない。＝12人

⑤子どもはもう欲しいだけ産んだ。＝11人

⑥胎児に障害がある。＝2人

⑦その他＝4人

・何でもゆるす、納得する。産む母親の意見ならすべてゆるす、納得する。(20代)

・納得の度合にもよるが、他人事として①～⑥すべてであると思う。(30代)

自分がいま、産まないように気をつけていること理由は、自分自身、子どもだから。子どもが産まれたら、虐待しそうでこわい。逆に、すべての敵から自分の子を守ることにヒステリックになる可能性のほうが大きいかもしれない。今のところ、私は毎日、先を先を見ていて落ち着かない。子どもがどう育つかなど、母親にのみ責任を帰すべきではないと頭では考えるが、自分みたいな情緒不安定の人が子どもを産むと、とても悲しいことが起こりそうなのでいやだ。でも、万が一妊娠したら、以上のことは中絶するに足る。

自分を納得させる理由にはならないかもしれない。時々、発作的に子どもが欲しくなるので、そっちの発作が勝つかもしれない。「世界があす終わると知っていても、人は草の種をまくものだ」とかって、そういうものかもしれない。自分の現在の生のためだけに子どもを産む、というのもあるのか？ 何も考えずに、生まれるままに産む……。子どもとしては、納得できないと思う。(20代)

・①～⑥すべて。(20代)

・中絶ではなく避妊の理由として。中絶が理由としては、II-4に書いたこと(母体の生命が危険なときや、強姦による妊娠など)くらい(ここなら①のみ)。(30代)

・(⑥に関しては)すごくむずかしい問題だと思う。「障害」があっても産むべきだ、とは言えないし、逆に「障害」があるから産むな、とも言えない。(30代)

6 日本では、優生保護法によって定められた疾病が胎児にある場合、中絶が認められています。が、胎児に障害があった場合の中絶は、障害者の生きる権利を否定し、障害者抹殺につながるものと考えますか。理由もお聞かせください。

・直接的にはつながる。どんな障害を持ってしようと、生まれてきたことを喜び、産んでくれた母に感謝すると思う。が、育てる側の苦労や障害者の自立の困難さを考えると、中絶はやむを得ないのではないかな。社会の状況が間接的に「障害者の生きる権利を否定し、障害者を抹殺」してる。(20代)

・どんな場合でも同じだと思いますが、優生保護法に関しては、法の執行部と親の立場では、ずいぶん解釈が違います。行政(と、ひとくくりにします)は「優生」というくらいですから、障害者をあらかじめ「弱者・障害者」と決めてかかり、実際、この国の障害者が暮らしやすい環境づくりを怠っているのは、その証拠ではないでしょうか。したがって彼らにしてみたら、金のかかる障害者など、初めから産まれてこなければよいのです。それを親が育てるのが大変だからというようなヴェールに包んだ言い方をするのは、まさに欺瞞です。それなら、すべての子を育てるのに適した環境を作っていくべきでしょう。親(特に女)が、胎児が障害をもって生まれてくるのがわかった時点で「優生保護法」の恩恵にあずかろうかどうか迷うのも、行政によって障害者が「弱者」扱いされているのを知っているからです。今の段階では、障害胎児の中絶はおろか、いま生きている障害者の生きる権利すら奪われていると言わざるを得ないと思います。(20代)

・まったく思いません(「いのち」は誕生の瞬間から始まる、と考えるから)。(20代)

・考えます。法の下で生をランクづけていると思う。1・2とも関連するが、妊娠している個人としての女の決定が一番目だと思う。そのうえで、個人の価値観としての生のランクづけは問題となってくる。(20代)

・産む人間が責任をもてないなら、やはり産まないほうがいいです。障害のあるなしをこえて。(20代)

・YES(生まれてから障害の出るケースもあるから、「抹殺」につながるかはわからないが)。いちおう子を望んでいる親が、健常児なら産み、障害児なら中絶、という選択をするとしたら、それは「障害児とともに生きること」「障害者自身が生きること」を十分否定していることになると思う。(30代)

- ・現状では、これから生まれようとする障害者を減らす可能性はあるが、障害者を産まない理由は、養育者の側が負担に耐えられないという判断にあるのだから、無理に禁止しても育てにくいだろう。胎児である障害者あるいは障害を持ったある胎児が、その障害を理由に中絶されようという時、それはある障害者を抹殺することになる。しかし、すべての親が障害者を抹殺してしまうとは思わない。その判断をする決め手は、「障害者の生きやすさの現状」である。障害者抹殺恐怖は、現状の生きにくさの反映であるから、それは解決すべきだが、「中絶」判断は、①妊娠をひきうけている女性、②養育をひきうける人、の意見がこの順序で尊重されるべきだ。(30代)
- ・（「日本では、優生保護法によって定められた疾病が胎児にある場合、中絶が認められています」という記述について）そんなことはありません!! 事実誤認です! 事実誤認をきちんと読者に知らせてください!! (30代)
- ・はい。ただし、障害児を産んだ女の負担には多大なものがあり、中絶した女性を責めるものではない。優生保護法という制度、胎児チェック、障害者を否定する現社会（障害者を産んだ女に多大な負担を負わせる社会）を変えていくべき。(30代)
- ・必ずしも、つながるとは思わない。直線ではないでしょう。(30代)
- ・考えます。なぜなら、すべての中絶はいのちの抹殺だからです。しかし、だからと言って、中絶を一律に認めないという考えを、私はもっていません。いのちの抹殺だということをしっかり認めた上で、個々が決めることだからです。私がイヤなのは、中絶はいのちの抹殺ではないから、とか、「私」のいのちのほうが大切だから中絶してもよい、だから私は悪くない、という欺瞞的態度・イナオリです。中絶は悪だが、この状況においては、私はこれを選ぶしかない。悪の罪はかぶろうという、堂々とした態度が必要です。(30代)
- ・つながると思う。中絶する動機がそうだから。でも、現実のこととして考えると、例えば非婚で子どもを育てようとする女性がいたとき、その子が障害を背負って生まれてくることがわかったとき、育てる勇気が果たしてあればよいが、そうでない場合は、認められてもよいという選択肢がないときつい、と私は思います。(30代)
- ・商品を選ぶように自分の子どもも「いいもの」だけ選ぶことを、どう思うか……。障害者の生きる権利はもちろん認めるべきだが、他の中絶にうるさいのに、こういう場合には都合がいいというのは、どうも法律の暴力ではないのか。(30代)
- ・元「活動家」の私は即座に「YES」と答えるが、それはあくまで「理屈」である。(30代)
- ・考えます。生産性のない者（老人、障害者、女）、いわゆる弱者を切り捨てる思想には反対します。(40代)
- ・はい。私自身、脳性マヒ者。障害者の存在がなぜ駄目なのか。健全者で生まれても障害者となり得る。障害者は後天的、生まれつきでない人のほうが多い。(40代)
- ・障害者抹殺につながる行為だと思う。理由は述べるまでもない。(40代)

7 日本では優生保護法によって「経済的理由による中絶」は合法化されていますが、それを5のように考えると、経済的理由による中絶は、低所得者の生きる権利を否定し、低所得者抹殺につながるものと考えますか。

- ・思わない。(20代)
- ・6の場合と少し異なります。障害者の場合は、生まれてくる子本人が障害を背負い、一生障害とつきあっていかななくてはならないのに対し、低所得者というのは親の状態です。「低所得者の生きる権利」という書き方は、「親の生きる権利」ということに思えます。私は親が子を産み育てるのは、その環境が整っている時だけにすべきだと考えますので、経済的理由による中絶の合法は必要であり、低所得者の生きる権利を略奪しているとは思いません。また、この項目が「人口政策」とからんで今までに何度か削除されかけたことは、無視できないと思います。(20代)

生殖技術を利用するかしないかは、許すも許さないも他人がどうこう言うことではないし、現に技術がある以上、それを利用する人は利用する。子どもを望むレスビアンやシングルたちにとって、「技術」があることは選択肢のひろがりやを意味するのだろう。でも、私はなんだかすっきりしてない。

これまで、産まない選択をしてきた女性たちに対しては「理由」の提示が要求されてきたけれど、産みたがる女性には「理由」は求められてこなかった。自分の子どもが欲しいということは、「血の幻想」なのかもしれないし、「自分の支配下における存在」への欲望なのかもしれないわけで、レスビアンやシングルだからと言って子どもを欲しがると理由が不問にされるとしたら、今まで「異性愛・既婚」女性があーだこーだ言われてきたのは何だったんだ、レスビアンやシングルはやっぱりフェミニズム的にエライ存在だったのか、ということになってしまふ。

それと、子どもというか〈家族〉にまつわる思い込みを私はクリアできていなくて、はたして完璧にクリアすることが必要なかもわからないんだけど、たとえば私が人工授精で産まれた子どもだとして、パパII精子銀行なのだと言われたらへ父を探して三千里をやってっちゃうんじゃないかと思うし、たとえば私が代理母をひきうけたとして、妊娠期間中に「これはやっぱり私の子どもだ」という感覚に陥っちゃったら裁判沙汰だよなと思うし、

たとえば私が子どもをすぐ欲しいと思ってるのに妊娠しないとして、どこの誰だかわからない男の精子をスポイトで自分の体内に注入し、それでできた受精卵を体内に抱えて栄養を与え続け、出産後は長期間にわたって関わりを持つということをするか、というあたりにくると、正直言って思考が停止したがる。もちろん、これらは私の感情だから、他人の行動にどうこう言わないよ。

あーでもない
こーでもない
すっきりしない

色川奈緒

第3の違和感。生殖技術を利用するかどうかは、つまり自己決定権を行使する選択肢の中に技術を入れるかどうかんだけど、今のところ、この「技術」は精子と卵子がないと成立しない。男女の性交による妊娠以外は認めないなどと言いたいのではなくて、どこかに「本人が認識する」としないと、どこかわからず、その妊娠にタッチしている「男性」が存在することを、無視しちゃっていいのだろうかと思うのである。

女性の身体は妊娠・出産に男性よりも深く関わっているがために、これまでに「道具扱い」という批判が出てきてるわけだけど、男性が妊娠の「道具」として扱われること（いわゆる「タネ馬」ね）はそんなに簡単に認められてしまったていいののかな、と思うのだ。

そして何よりも、そもそもが生殖技術がなぜ発達してきたのかを考えると、私の考えはつまづいてしまうのである。これまで技術開発のターゲットとされてきた「異性愛・既婚」の女性にとっても、

生殖技術は福音などではなかったのだし、けっこうな費用と肉体的
労苦と、技術によっては成功の度合が低いこと、日本では認められ
ていないけど代理母については経済格差が社会問題となっているこ
と（子どもを欲しがる上流階級の夫婦と、代理母を引き受ける労働
者階級の女、とか）などを考えると、どうしても手放しで喜べない
私がいる。

望む者が望む時に望む形で、望まない者は望まないことを強制さ
れずに、生きていけることは大切なことなのだけれど、例えば、い
まある生殖技術が女性の手により女性のためにつくられたものであ
ったならば（この場合、セクシュアリティによる差別はなく、婚
姻・家族制度による抑圧からも女性が抜け出ている、ということが
条件になる）、私もこんなにモヤモヤした気持ちにはならないのかも
しれない。けれど、科学技術の進歩をロマンという名にすり替えて
きた「男社会」の産物という側面が無視できない生殖技術を、私は
どうしても、自己決定権の選択肢として認めきれないのだ。



- ・まったく思いません（「いのち」のは誕生の瞬間から始まる、と考えるから）。(20代)
- ・そう思う。どちらも動機は「近代国家の体裁」だと思う。障害者も浮浪者もみっともないから失せろ、ということだと思う。(20代)
- ・生きられないと思うなら、産んじゃだめです。お金の面でも。それでも産みたいなら別。(20代)
- ・NO。経済的に育てられないから中絶（低所得者の子の抹殺？）というケースのことを言っているのだとしたら、初めからつらなければ、抹殺ではないと思う。また、低所得者は子を望んでも持てない、ということを行っているのではあれば、そのこと自体は問題だと思うけれど、そのことによって生存が危うくなるほど深刻な差別を低所得者が受けている、というような事実があるのでしょうか。「低所得者」というのは経済状態が好転する可能性もある（流動的な？）存在として一般に考えられていると思うので、障害者のように人格と結びついて一生貼られるレッテルと違うのでは？(30代)
- ・低所得者は親であって、産まれてくる子ではない。(30代)
- ・他人から「あなたは貧乏だから産むべきではない」と言われるのは権利の侵害だが、産む本人が経済的理由で産みたくないと思えば、それを理由にしてもいいと思う。(30代)
- ・いいえ。優生保護法制定の目的としてはあったかもしれませんが、現実には（現在は）「健全者」が「障害者」を抹殺するのと違い、母親自身の流動的な事情（今の日本では、こう言えると思う）を根拠とするものであるから。(30代)
- ・必ずしも、つながるとは思わない。直線ではないでしょう。(30代)
- ・問題のたて方として、同列には扱えないと思います。低所得とは個人の状況であって、属性ではないから。(30代)
- ・つながると思う。(30代)

- ・⑥と同じで、強いものだけ認めてもらうのは不平等なこと。こういう場合は、福祉の次元である程度、解決できるのではないか。(30代)
- ・よくわからない……。 (30代)
- ・考えます。(40代)
- ・はい。生活の安定の保障がある者だけが出産できる考え方に反対。産んだ後で生活が崩れる場合もある。(40代)
- ・そうは思わない。(40代)

8 産む・産まないの決定に男性はどう関わらべきと考えますか。

- ①その男性がパートナーの女性の生き方を尊重し肯定しているのであれば、出産の時期や子どもの数について、意見を述べるのは当然。=10人
- ②その男性が男性本位の考え方しかしていないのなら、産めとか産むななどとは言ってはならない。=8人
- ③互いに尊重し合っている、経済的基盤や育児に関する条件などについて、男性の望む状況が整っていないのなら、産みたいという女性の意志に異論を唱えられる。=6人
- ④互いに尊重し合っていて、経済的基盤や育児に関する条件などが整ってなくても、男性は産んでほしいと主張できる。=4人 ・主張のみ。強制ではない場合。(40代)
- ⑤いかなる状況においても、女性のみで決めるべき(男性は関わらなくてよい)。=3人
・責任を果さないということとは違う。決定権は女性にあると思います。(30代)
- ⑥その他=9人
 - ・決定を女が自分ですることということをわかっていさえすれば、何でも言ってよいと思います。それは、個人と個人のやりとり全般にも言えること。(20代)
 - ・男性でないから答えにくい……。男には産めないんだから、要望をもって当然と思うが、そんなにうまくいくもんかい。(20代)
 - ・今、経済的援助は別にして、実際の子どもの養育は母親がしていることが多いが、その養育を父親がするのなら、決定に関わってもよい(意見を述べる程度)。そもそも、「産みの母」と「精子提供者=父」という生物学的な「両親」にのみ養育の義務と子の人生の決定権を与えすぎるのは、おかしい。両親以外でも育てる人がいて、育てる(育つことのできる)環境が、すべての子に必要である。(30代)
 - ・最終的な判断は女性がすべき。(30代)
 - ・避妊の段階で絶対に関わるべき。結婚している女性の中絶が多数をしめているという状況が、もっと問題にされてよいはず。彼女たちは、夫にも告げずに、「自分で産まないことを決めて」中絶を重ねている。男性は精子のタレ流し状態で、パイプカットなど思いもよらないようだ。避妊手術というと、女性のもののように思われているのが社会通念。避妊ということでは、絶対に話し合うべき。しかし、妊娠してしまった場合には、女性が全決定権をもつべき。(30代)
 - ・①であっても、最後の決定は女性がすべき。(30代)
 - ・相手の男性に生き方を尊重された実感がないし、かと言って、産めとか産むなと言われた覚えもないし、産みたいと言って異論を唱えられたこともないので、正直言って、ようわからんです(あくまで自分の経験にこだわっている)。(30代)
 - ・基本的には妊娠するには女だけではなく、男もかかわっているはずでしょ。出産・育児について、なるべく対等であるべと思う。(40代)

IV 生殖技術について

1 体外受精について、どうお考えになりますか。理由もお聞かせください。

①まったく認めない=2人

・性のない妊娠は×。受精卵を体に戻すとは、体を器具扱い。多胎の場合の中絶など、なおさら。(40代)

②全面的に認める=3人

・どういう形で子どもを作るかはプライベートな問題で、第三者が賛否唱えることではないと思う(このアンケートに挙げたことではなく、そういう選択をした人に対して周りがとやかく言うこと)(IVに関して以下同)。(20代)

・子ども欲しければ。(20代)

③状況や場合によっては認める=8人

・私は生殖技術そのものについての知識に乏しいので、明確な理由は言えません。直接質問の答えにはなりません、次のように言ってみたくと思います。

私は現在、子宮内膜症を患っています。この病気は、ご存じのとおり、不妊症との深い関係が指摘されており、その治療も不妊症治療の一環として行われることが多いようです。もちろんこれは、これから子どもを産みたいと希望する女性に対してであり、もう既に子どもを産んでおり、もう子どもを望まない女性には、提示される治療法も子宮摘出など、とたんに荒っぽくなったりします。医者態度もずいぶん違うようです。このように、妊娠・出産の機能を、人間の女のもつ機能のほんの一部と考えるのではなく、女の機能のすべて、女として産まれてきたのなら当然持っているしかるべき機能、これがなければ女ではなく人間ですらないという考え方が、ひしひしと伝わってきて、まったく不快このうえありません。(20代)

④その他=5人

・判断不能。(20代) ・不要と思う。(20代)

・認めるが、なぜそこまでするのか理解はできない。(30代)

・なぜそこまでしなくてはならないのか、わからないが、まったく認めないと言い切るほどでもない。(40)

2 人工授精について、どうお考えになりますか。理由もお聞かせください。

①まったく認めない=2人

・不自然な妊娠。家制度、「夫婦であれば妊娠が当然」の考え方に反発を覚える。(30代)

②全面的に認める=3人

・子ども欲しければ。(20代)

③状況や場合によっては認める=8人

④その他=5人

・判断不能。(20代)

・不要と思う。

・認めるが、なぜそこまでするのか理解はできない。しかし、友人男性の精子をスポイトで挿入して妊娠する女性がいってもいいし、性交が生殖の最高手段だとか、生殖が快樂の最高の目的だという考えはない。〈性交=愛=家族(愛)=血族・親族〉連鎖は限界がある。(30代)

3 代理母について、どうお考えになりますか。理由もお聞かせください。

①まったく認めない=6人

・代理母については、この制度の下では「女の産む・産まない権利」の輪郭が曖昧になるような気がするのですが……。自分では産めないから他の女性の子宮を借りる、というのでは、1に書いたような、「女=産むだけの性」に貶めることになりはしないでしょうか。現時点では、認めるべきではないと思います。(20代)

・女の体を売ったり買ったりすることは許せない。(30代)

②全面的に認める=3人

・子ども欲しければ。(20代)

・しかし、代理母が遺伝子父母より「母性」が低いとき思わないし、そもそも生物的關係によりかかりすぎる体制には限界を感じる。(30代)

③状況や場合によっては認める=4人

④その他=5人

・判断不能。(20代)

・②と思うが、たとえ契約していても、途中で親権などを代理母が求めたら、絶対わたしてもいいことにすべき。代理母の権利は最重視されるべき。(30代)

・妊娠のみを体験したい女性がいれば可。(40代)

・不要。特に“代理母になろう”と考える人の心理を不気味とってしまう。

4 最近、欧米ではレズビアン的人工授精による妊娠・出産が増えています。そのことや、シングル女性の人工受精による妊娠・出産について、どうお考えになりますか。

①まったく認めない=1人

②全面的に認める=8人

・育てられる環境が整っていて、欲しいと望むなら、かまわないと思う。上に同じく、当人たちのプライベートな問題だと思う。(20代)

・子どもの関わりは、同世代ではない個人との密接な関係を可能にし、親としての経験は、その人の人生をより有意義なものにする可能性がある。また、子にとって、親が遺伝子父母であることは、理想でも、必要なことでもない(差別はあるだろうが)。(30代)

・とっても難しいことだが、その人の人生はその人のものだと思う。でも、いのちを人工的に作るということは真剣ら考えるべき。(30代)

③状況や場合によっては認める=8人

・これに関しても知識がないので答えにくいのですが、レズビアンやシングル女性の場合、1回~数回(我慢して)妊娠するまで男性とセックスして自然受胎を待つという方法もあることを考えたら、人工授精は心理的負担も少なく、ある程度、確実な技術として提供してもよいのではないのでしょうか。ただし、結婚の可能性を持つシングル女性の場合は、カウンセリングも含めて慎重に見極める必要があると思います。(20代)

・うーん、むつかしい。(30代)

・強制でない妊娠・出産(の場合なら)。(40代)

④その他=2人

・判断不能。(20代)

・どう考えてよいかわからない。これが一番、答えるのに困りました。なぜかと考えると、第一には、そういう人を身近にも知らないし、小説で読んだことさえない。だから、ほとんど考えたことがないからですね。

私の頭の中では、人工授精というものへの抵抗感とレズビアンやシングル女性の権利を擁護したい気持ちとが衝突します。子どもがちゃんと育つだろうかということについては、ぜんぜん心配しませんが、欲しいと思ってもないのに妊娠して産んだ私としては、なぜ、人がそれほどまでに子どもが欲しいと思うのか、わかりません。私は、子どもがごく小さい頃には、かわいく思っていました、成人した子どもなんて、かわいくも何ともありません。こういうことは言うてはならないことだから、他人には言いませんが。子どもなんて(私と親との関係を考えて)自分勝手なもので、子どもからすれば、親などうとうしいだけのものです。なるべく、うとうしくないように、子どものプライバシーには一切、口をはさまないようにしていますが、それでも子どもは私をうとうしく感じていると思います。

アメリカでは、精子バンク、あるいは友人から提供された精子で人工授精し、妊娠・出産するレスビアンが増えているようである。その上、最近では、産んだ母親のパートナーである女性にも子供の親権が認められるケースが出てきていて、太平洋の向こうの状況は刻々と前進しているようだ。

日本にも別れた夫との間に生まれた子供を育てているレスビアン・マザーはたくさんいる。だが、今のところ、先日テレビで紹介された、男女役割をかつちりしている職業オナベさんとその「妻」のカップル以外、人工授精で子供を産んだ女と女のカップルを私は知らない（くだんのオナベさんとその「妻」は「自分たちはレスビアンではない、男と女だ」と言っているので、レスビアンの範疇には入らない）。

しかし、あと一〇年もしたら状況は変わるだろう。子供を産みたい、産んだ子供を育てたい、と思っているレスビアンは少なくない。精子バンクはダメでも、友人のゲイから精子をもらう等、選択肢は無数にある。隣の部屋から注射器やスポイトに入れて運ばれてきた精液が、ペニスによって運ばれてくる精液よりも「人工的」だとは思わないし、自然の摂理に反しているとも思わない。ペニスから腔の中に直接排出される精液だけが「自然」だと言うのなら、これはまたひどく優生思想的、「五体満足」主義的ではないか。「産みたくなさ」「女性」「産むこと」が強制される、その手段として

レスビアンと生殖技術

掛札悠子

生殖技術の進歩が利用されることには、私は言うまでもなく反対する。しかし、生殖技術に反対するひとつの論理として「女の人生は子産みに支配されない」と言うのなら、性的指向を人生の優先順位に置くことで、結果的に「自ら選択した不妊」状態になった「子供を産み、育てたい」レスビアンの声に誰もが耳を傾けるべきである。

シングルでいる、あるいは、レスビアンでいるということが、「子産み、子育てを諦める」ということと同義であってはならない。ことに極端なフェミニズムの文脈によって、シングル女性やレスビアンが「子産み、子育てから自由な存在」として自ら、あるいは他者から特権化して語られることなど、決してあってはならない。それは、ペニスの勃起と射精を「当然あるもの」とし、法律婚を主としたモノガミーを当然とした異性愛の中に「女の子産み」を女の手によってからめとり直すことにほかならないからだ。「女の子産み、子育ては社会制度と関係なく、望むものには可能であり、望まないものにはそれもまた可能である」という理念こそが、生殖技術を巡る論争の基礎に置かれるべきだと私は思う。

子産みを望む異性愛の女もいれば、望まない異性愛の女もいる。同様に、子産みを望むレスビアンもいれば、望まないレスビアンもいる。技術はそれを自ら必要とし、望む者の前には開かれていなくてはならない、と私は考えている。

親と子の関係なんて、いいものじゃありません。世間一般でそれをすばらしいものみたいに言っているのは、まったくの嘘です。私には、恋人、友情のほうが、ずっとずっと大切な関係です。(30代)

・不要=1人

5 胎児診断をどう考えますか。理由もお聞かせください。

①まったく認めない=3人 ・障害者は生きていけない思想に反対。(30代)

②全面的に認める=2人

・中絶の権利など考えれば。(20代)

・「診断」があれば「治療」もあるだろう。(30代)

③状況や場合によっては認める=10人

・現状をよく知らないで……。(20代)

・子どもが健康に育っていることを確かめたいという親心は理解できる。それと、診断を利用しての産み分けや中絶は別問題だと思う。(30代)

・状況や場合によっては認めざるを得ない面もある。(30代)

・女性と胎児の健康のためなら。(30代)

④その他=2人 ・胎児診断というものを、よく知らない。(20代)

・自分はしたくない。出たところ勝負！(20代)

・わからない(認識不足)。

6 いわゆる不妊治療について、どうお考えですか。

①子どもが欲しくても、できないのであれば、違った生き方を模索したほうがいい。=9人

・これは私の宗教感(仏教)に基づくもので、子どもに恵まれないのも仏のご慈悲、と考えるからです。ですから、万人に当てはめて言うことはできません。ただ、不妊治療というのは女性にとって心理的・肉体的に大きな負担を強いられるようですので、不妊治療地獄に陥っている人は、少し立ち止まって、本当は何を希んでいるのか、何が自分にとって大切なことなのか、考えることを勧めることにやぶさかではありません。(20代)

・自分個人については①と考えているけれど、悩んでいる人に向かって反対できるほどの確固とした根拠・理由のある意見を持っているわけでもない。(30代)

・「選択肢は多様にあっていい」と思う半面、排卵日にセックスしてもできないのであれば、「子どものいない生き方」をすればいいと思う。ただし、精子が手に入らない4(レズビアン・カップル)の場合は、少し別と考える。それから、1、2、3の場合、「法律上の婚姻関係にある夫婦間」という枠はずすべき。(30代)

②どうしても子どもが欲しくてできないのであれば、してもいい。=5人

③どうしても子どもが欲しくてできないのであれば、当然すべきこと。=1人

④「不妊」治療に懸命になる医者、おかしいと思う。=6人

⑤その他=5人

・ごめんなさい。不妊治療がどういったことをさすのか、しりませーん。わかりませーん???(20代)

・なぜ、そこまでして子どもが欲しいのか考える必要がある。そのことがとても「病的」な感じがするから。しかし、①のような考えをおしつけるのもムリだと思う。(30代)

・技術的に可能になることによって、「女=母」という枠組に押しこめられるという流れもあるわけで、世の中がもっとニュートラルであればよいのだが、今は一概にこうとは言えない。(30代)

・どうしても子どもが欲しいなら、やれることはゆったらいい。私は、育てて愛情がわくと思っているから、血のつながりにこだわるのはやめたほうが良いと思ってるけど。(40代)

- ・養子を考える。(40代)
- ・子どもを産むべきという社会の圧力が非常に強い中で、子どもが欲しいといい人の気持ちのどこまでがその圧力の結果なのか、そうではないのか、わかりませんね。社会の圧力の結果ならば、賛成する気になれないけれど、それを計る方法はないのだから、どう答えたらよいか……。わかりません。(40代)

☆以上、何か意見がありましたら、ご自由にお書きください。

- ・生殖技術は背徳の生命操作だとする意見もあるが、医学自体が生命操作である以上、当然の技術進歩だと思う。昔は死ぬしかなかったが、今なら手術すれば助かる病気はたくさんあるし、たとえ治療を拒否して死を選ぶ人がいても、その人の自由なんじゃないかな。中絶や生殖技術についても、同じく本人の自由だと思う。(20代)
- ・急いで書いたので、いかげんですが、そのぶん正直かもしれない。(20代)
- ・子どもは、欲しければつくる。いらぬなら、つくらぬ。つくれぬなら、もらったっていい。愛されない子どもより、愛される子どもが多いほうがいいに決まっている。(20代)
- ・「産む・産まない」より、障害者を含めてすべての胎児が「産まれる」条件が整えられる必要がある。しかし、その条件があまりに物質的側面にかたよると、すべての人(子)に同じくらいの経済的助援を、という制度要求になり、有効な法や制度を作るのはむずかしいと思う。いずれにせよ、「個人の意志」尊重が、現在の社会の根本原則だと思うから、制度は、多様な個人がそれぞれの生き方に合わせて、選べるサービスの形態にする必要があり、現状のような取り締まりや規制、であることはもちろん、たとえ多数派の現状がどうであろうと、それを規範として制度を作ることは、マイノリティーの抑圧以外の何物でもなく、「限界ある制度」として完成度が問われるだろう。(30代)
- ・生殖技術は、産めない女にとっての福音ではなく、女を産む道具として、ますます追いつめていくもの。生殖技術の発達は、明らかに優生思想、遺伝子操作に支えられている。「産む」ということや「血」にこだわらない親子関係を模索していく方向で考えたい。(30代)
- ・(IVについて)すべて「状況や場合によっては認める」としたのは、どうしてもやりたいという他人の自由を侵すつもりは、私にはない、という意味。私自身については、生殖技術を受け入れる気はない。そこまで金をかけて、不自然なことをしてまで、「自分の血(遺伝子)を分けた子」が欲しいと思わないからだ。子どもが欲しい・育てたいなら、養子を育てればよい。生殖技術の発達の背景には、「血」の信仰が強くはたらいっている。それが、私はいやだ。「生母信仰」＝「母性信仰」「家・家族制度」「民族主義」「エゴイズム」に、このことがしっかりとつながっていることを考える必要があると思う。(30代)
- ・私が「子どもを産みたい」と思うのは、「妊娠・出産の経験をしてみたい」ということで、子育てはしたくない。これは不可能。「子育てまでしてもいい」と思うのは、「好きな男の子どもが欲しい」時だが、これは経済的・物理的に不可能。……というわけで、私は子どもは産まないでしょう。
アンケートには関係ないけれど……妊娠・出産は、単に「新しいメンバーが増える」といったナマ易しいことではない。その女性の価値観までもひっくり返す力を持っている。そういう例を、ごく最近、身近で体験した。決定権はもちろん、経済的にも物理的にも、女がたったひとり産め、育てられるような社会になってほしい。できれば、精子はパートナーのものではないものを。婚姻制度を支えているのは「子ども」だ。(30代)
- ・中絶は保険がきかないので、金がペラボーにかかる。手術するのに10万もかかるなんて、1ヶ月の家賃より高いんだから、まったくもー。で、そういう金もつたないの、避妊は必ずしてる。なんせ産みたくないから。育てる金もないし。産むは易し、育てるは難し。「産んじやえばなんとかなるわよ」なんて、おーウソ。それに私、子ども、大キライなの。強姦などの場合の中絶は、保険で手術できるようにすべきだと思う。(30代)
- ・自分を愛し、人を愛することが、とても大切なことだと私は思ってる。それがすべての生きるうえでの規準。(40代)

道楽にしては、 肩の荷が重い、 子育て

小口容子

この間、うちに、子どもの保育園の友達遊びに来たとき、私が「おーしゃんの大事なものだから触っちゃ……」と言いかけると、突然うちの子どもがまじめな顔をして、「おとうさんでしょ！」と言い直した。うちの子どもはもう五歳になるというのに、親のことを「おーしゃん、かーしゃん」と呼んでいるのだ。しかし、さすがに最近、保育園で「かーしゃん」などと呼ぶと、「かーしゃんってなにーっ」と言われるので、人前では意識しておとうさんなどと言っているらしい。

こういう日常の瑣末なことって、子どもがいるもん同士でしかしゃべらない。実は私の友達のなかで子どもを産んでいるひとは皆無。そのうち誰か産むだろうと思っていたが、

誰も産まない。(あんたは子どもを産んでから新しい友達ができてないのか、っていうことは聞かないでください。)子どもがいない人とは、映画やドラマや松田聖子については語り合えても、子どもの話はほとんどしない。「きょうはクリスマスだから、トリー君がトンガリ帽子をかぶって、一家でケーキ食べるの？」という程度の認識しかしない。一方で、「子どもの頃に両親のセックスを見たショックで閉所恐怖症になる」という一見、科学的な見解を信じている人もいる。うちの子どもは、「オレきのう、かーしゃんがおーしゃんとエッチしてるの見ちゃったよ。うるさくてねむれなかつたんだよ、オレ……」と言うおらかなやつで、閉所恐怖症にはなりそうもない。

もつと瑣末な話がしたい。子どもの間ではやっているくだらない遊び、集めているヘンなもの、保育園の保護者会でいつも話を深刻にして場を暗くするおお母さん、卒園文集に中学生の交換日記のようなことを書く保母……。女は寄るとさわると男の話、やったやらないやりたい話で盛り上がるが、主婦は子どもの話(それと夫の悪口、家事をやらないわーとか帰ってこなくて母子家庭のようよーとか)で盛り上がるのだ。こういう井戸端会議をする場がないのは、とても残念だ。仕方が

ないので私は日夜、夫と井戸端会議をしている。私の夫は井戸端会議もできて、エライ。なにしろ、よそのダンナの悪口で守り上げられるんだから。やゝまた夫の自慢になっちゃったわゝ何の話だっつもの。

私にとって育児は「時間と金のかかる健全な道楽」である。特に子どもに期待することがなければ、毎日、子どもがタラコのような草を見つけ目の色変えて摘んでいる姿や、突然犬が飛びかかってきた時のものすごい表情の変化などを目の当りにできて、それはとても楽しい。だから、間違っても「中学出たらすぐにトビに弟子入りして、立派な職人になつて欲しい」とか「制度に真摯に立ち向かう過激な運動家になつて欲しい」などという期待をかけてはいけない。それは邪道でもんです。せいぜい、「大きくなつたら一緒に酒が飲みたい」ぐらいとどめておいて、先回りせず、後から「あれっいつの間にこんなにかんなんことが？」と追いかけていく親であることが、楽しむ秘訣であります。

私の場合、子どもができちゃったとき、まさに「できちゃった」のだったんだけど、産むことについては少し悩んだ。私も今より若かったし（あたり前だ）、子どもはあまり好きじゃなかったし（今でもよその子どもはひとつもかわいくない）、プータローというか

パニーガールというか（ほんとは学生でもあったのだが……）、とりあえずいきなりハハオヤになる状況ではなかった。相手の男が逃げたり、「バカヤロウ！ 墮ろせ！」と言うような奴だったら（そんな奴はあんまりいない）、墮ろしていたと思う。だから、未だに世間で言うところの「未婚の母」の人には、桐島洋子さんにさえ頭があげられない。私が産むことを選択したのは、まわりのいろいろな要員に左右されたのだから、偉そうにすることはひとつもなく、へいきあたりばつたり〜などと人には言つたものだ。

けど、私が「産みたい」って思つたことのいちばん大きな理由は、人生に新しい趣味が欲しい、つてことだった。今までにしたことのない、とてもたいへんそ〜で、とてもおもしろそ〜なこと。私はその頃、人生でやることももうなくなっちゃつた気がして、ここで、ここでこの新しい趣味を選択しなかつたら、きつと不健全な趣味に走つていたと思う。ここで言う不健全な趣味とは、テレクラやギャンブルやアダルトビデオ出演やアル中・ヤク中のことだが、不健全だから悪いというのではない、人にはそれぞれの人に合った趣味というのがあるのだ。

そういうわけで私は、勝手に趣味で子どもを育ててるって意識が過剰で、子どもに引け

目まで感じる。人から子どもに甘いねえなんて言われるが、悪くて子どもを怒れないのだ。夜中まで飲屋と一緒にハシゴさせたり、遊んでいるそばでアダルトビデオを見ていたり、二日酔いで朝起きられなくて自分は寝たまま子どもにふりかけご飯を食べさせているようなあたしが、どーしていちいち細かいことで子どもを叱れよう。

私にとって育児は、牛乳パックの再利用や、健康法や、男を追いかけると同じ趣味である。四六時中、牛乳パックやトレーや天ぶらの残り油のことを考えてる人つて、やつぱりこわいように、子どもに固執している人つて、ハタから見ると変。趣味にしちゃあ荷が重いなあくらいに考えるのが、ちよ〜うどいいんじゃないでしょうか。子どもなんて絶対思うようには育たないんだからね。（蛇足ながら、四六時中、男のことを考えている人も、やつぱり困ります。あつ、私か……。）

超やおい少女への道

あるいはやおい少女私見

どうも。CHOISIR三四号で、「やおい少女の解剖学」とゆう駄文を書いた野火ノビタとかゆう人です。そのとき、私は全てのやおい少女のスポークスマンとして語るッ、などと大プロシキ広げて、クソマジメにカタリまくったわけですが、このたびは、このスポークスマンの肩書きをほっぽって書きま

す。しかし、それは実はこのたび足を洗いまして……というコトではなく、私はなお歴然とやおいに燃え燃えです。ではどうしてかという、私個人として語るためです。

さきの小文で、私は「全やおい少女スポークスマン」であるためにとりあえず、私という個人を置いて語ったわけです。つまり最大公約数において語ったのであって私個人という絶対数において語ったわけではありませんでした。さらに、スポークスマンとして語るッ!!とわざわざ明記したのは、肩書きの陰に私個人を隠すためではなくむしろ、この私個

人が最大公約数に埋没するのを防ぐためでした。よって今より個人として書きます。あと、前回の文は、極論こそが問題を明確にし、極論こそがインパクトじゃ!!と思っている私の舌戦戦略上、力一杯極論してありますので、全てのやおい少女がアーゆうふうになっちゃってるのか、私個人をあの論どおりのクソマジメでカタい人だとか、イツちゃってる人だと思ったりしないでネ!! オレ、実はフザけた人間なんだよ……。

(ただし、あれはあれなりにちゃんと真面目に書いたので、今からおいらがフザけた人間なのがバレバレになっても、あの論全てを否定するのもナシにしてくれ。極論はしたがそれぐらいマジなものもあるのよーって意味で、やおい少女ってわかんねーよ、ケツとか思ってる人のハートをちょっと揺さぶりたかったの。……いけねえ、ちょっと自分自身に戻ってみたらいきなり文体がしおしおのパ

に……)

前置きが長くなりました。で、私個人に戻って見たところで、やろうと思っていたことを実は前回の栗原さんの論ですでに語られていたりして……。あーっ、先をこされたー!!と、実に思ったことです。それと云うのが、「やおい少女の現実認識が間違っているのではな

いか、ということだ」。それは言うなれば「現実」という幻想です。言い換えると、フツー幻想というか、マトモ幻想。全く、栗原さんのおっしゃるとおりですーとか思っちゃったので、反論も何も。ゆえに、栗原さんの論とカブリまくると思えますが、あえて私なりに同じことを言いますと、私自らもやおい少女として内側から見ると、やおい少女の世界観というのは、確固たる「フツー(マトモ)」とはこれこれこうゆうもの」という世界認識と、その世界から疎外されている劣性と

野火ノビタ

しての私、とゆう構図である、ということが確かにあると。そういう世界認識にはじまる自己認識は、非常に絶望的でツライものなわけです。ゆえに、疎外される劣性、という認識から、自己崩壊を防ぐ手立てとして、疎外される劣性をその特殊性をタテに、疎外される優性に転化美化してみたり、「フツー（マトモ）」とはこれこれこうゆうもの」と認識される世界から、自己をなかなば完全に隔絶してみたりする。さて私個人は、それではいけねえ、と思うわけです。

栗原さんのやおいの病・治療への三段階評価でいくと、私個人としては「その三・愛されなければ女の存在価値はないという恋愛幻想を解体すること」までイッチャっててる気がします。ちなみに「やおいの脱出法」では、その二のセックスストレス人生ってヤツみたい。やおい好きはサツパリ治りませんが、今現在わが世の春じゃといったカンジで人生って面白い。

という私は、実はやおい好きを指摘されようが批判されようが全く平気なのです。だから、このやおい論争でしばしば登場した、必ず罪悪感のような後ろ暗さを引き摺っているやおい少女たちというのは、実を言うとその方がなぜに？と思ってしまうのだ。

しかし、来た道として、私もまたフツーな世界と疎外される自己という、絶望的な世界認識を持っていたし、まさに己れの特殊性をタテに孤高をキドったものだった。それを自分で何とか越えて来たらしい。そのミチユキは栗原さんがすでおっしゃって下さったとおりです。一日中マンガ描く生活を選択し、男尊女卑バリバリのダメな会社を大笑いでプチ辞めて、来るところまで来たここから眺める世界はビューチフルであります。

前回、私はここのことはとりあえず不問に付して極論ぶつこいたわけです。というのも、前回の論で私が「全やおい少女スポーク

スマン」として述べたかったのは、やおい少女の切実さであったためです。それは先述の絶望的な世界認識に基づく切実さです。しかし、その切実さの根源であるこの世界認識をもし彼女たちの誤解とするなら、その切実さは空虚なものであるかというときにあらず、切実なもんはやつぱり切実なものであります。でも、絶望的世界認識はやおい少女たちの誤解だとか言う、気軽に「やおいは現実逃避だ、だからやおいなんて捨てて現実を見よ」と言う現実至上主義者が、ホラやつぱり、と思ったりするんじゃないかと思うとハラ立つので、あえてそのことはすつとばして切実さだけを主張したわけです。くりかえすが、切実なもんは切実なんです。ちよつとこの絶望的世界認識を持たざるを得なかった人々の苦悩ってヤツを、そいつらの立場に立つて思っ欲しかったのだ。

さて、彼女たちをこのような絶望的世界認識のなかに追い込んだのは何であった

■やおい論争■

か?という、発端はやっぱり、それでも「現実」だったと思うのです。それは恐らく幼い頃のできごとであろうことなので、非常に狭い視野からの「現実」でしょうが。それは例えば調子こいて男の子の言葉をマネてみたらお母さんに叱られたとか、そういう些細な出来事だったかもしれません。でもとりあえず、それこそがまさに、「女の子はこれこれこうあるべき」||「フツー(マトモ)」とはこれこれこういうものだ」という幻想としての「現実」だったのではないかと。そりゃフエミニストの人レズビアンの人ゲイの人から見たらそれが幻想なのは自明でしょうが、しかしその幻想が修正されることなく補強される方向にばかり不幸な「現実」との出会いが重ねられたとしたならば、「フツー(マトモ)」とはこれこれこういうものだ」と信じ込むことになっても当然でしょう。ところで世界認識とはいつ成立するのか? それはおそらく自己認識(自意識)が成立するのと同時期でしょう。では自己認識とはいつ成立するのか? そりゃごく幼いころだろう。……つまり刷り込まれちゃってるのであります。

私は、男も女もレズもゲイも、よっぽど特殊な状況(狼に育てられちゃったりな)で育ったヤツ以外は、ほとんどの人にこういう刷り込みは行われていると思う。やおい少女に限らずだ。やおい少女ではなくレズビアンでもフェミニストでもない、いわゆるごく「フツー」の女の子、男に養われるのが当然と思っている、屈託なくオトコの腕にブラーんとプラ下される女の子というのが、実はこの幻想としての「現実」の一番の犠牲者なんじゃないのか? フツー幻想を刷り込まれながらも、それに乗らなかつたやおい少女より、何の疑いもなく乗ってっちゃつたヤツの方がマズインじゃねーか? ……まあそれはそれとして。

やおい少女の現実認識は、栗原さんの言うように確かに間違っている可能性大だ。しかしところで、前回の論で私が、やおい少女の敵方として想定した「やおい」は現実逃避である。だからやおいなんで捨てて現実を見よ」という文を正論と感じる人が言うところの「現実」というものが、「フツー(マトモ)」とはこれこれこういうもの」という幻想としての「現実」ではないと言いつつ切れないわけで、私が個人的に、なっちゃうやないよなと脱力したり怒り狂ったりするのは、まさにこのようなマトモ幻想にとりつかれた現実至上主義者に対してなのだ。レズビアンの人ゲイの人フェミニストの人がそうでないことをほんとに祈る。マトモ幻想を脱却した方には、やおい少女の襟首つかんでセツキョーする権利がある

と私は思う。

しかし自白するが、そもそも私がこの論争に参加するきっかけというのは、友人にCH O I S I Rのやおい論争関連の記事を読ませて頂いたときに、やおい少女批判者の方々の中にこのマトモ幻想の存在を断定したゆえのイキドオリだったのだ。マトモ幻想の放棄は、栗原さんがこの論争に加わるまでは明確に示されたことはなかつたですから、とにかく誤解してました。しかし、私がいま言うところのマトモ幻想とは、現実こそが至上であつて幻想を生きているのは逃避だということ、すなわち自分のカラダ使つてSEXもせんと、幻想をばかり生きているのはマトモじゃない、といったマトモ幻想も含まれますから、そのマトモ幻想を降りないヤツの話はオレは聞かぬ。

さて。マトモ幻想降り降りの現役やおい少女の私自ら、やおい少女にセツキョーたれようと思ひます。……現実を見よ。エーッ!!

無論、ここで言う現実とは、かくありナム式の幻想としての現実ではない。自分自身のキモチというものだ。情念だ。いついかなるときに、どのように感じ、行動するか? それに立脚しない同人誌が最近あんまりに多い。絵だけキレイで内容の無い本ばかりバカ売れしている。もちろん内容が有るがゆえ

に売れてる作家だっている。でも内容がウスつべらーい本が受けているのは事実だ。

ちなみにそういうサークルの読み手というのは、いわゆる読み専、自分では生産せず消費するだけの年齢層の低い読者たちだ。クロウト受けのする作家の本を、まずこの子らは読まない。ムズかしいからである。この子らは言わば「浮動票」で、流行のジャンルを渡り歩き、「大手」と呼ばれる作家の本だけを買う。とにかく深くツツこむというをしないので、ビョーキもさほど深化せず、オトナになると足を洗ってヨメなどに行く。マトモ幻想にかられて見るなら、一番マトモへの道が近い奴等であるが、さきにも述べたけど、こいつらこそマズインじゃねーか？ 私は作家として、この類いのやおい少女には全く期待していない。

あと、リクツこね太郎。とにかく「意味」がないと安心しないが、真剣つばいノリさえあれば意味があるもんだと誤解している。リクツとか言葉（セリフ、キーワード、テーマ

など）に振り回されて実は作品が表層で空転している。さらにそれに気付かないで好んで読む。男性心理を本などで研究したり、ゲイムーブメントをお勉強したりして。オマエ女だろ、自分自身の感情と渡り合わないで、虐げられても貫く愛、とかうっとりしてるんじやねえ。もつとこう、あるだろう、いろいろとビミョーな感情つてものが。

それはあくまでも女の子の感情であって、やおいの主人公は男の子だからその感情を仮託することはできないと考える方がいるなら、それは違うと思うね。むしろ「フツー」な女の子になれなかつた女の子としての感情を男の子に仮託することにやおいの奥義はあるんであって、その自分自身の感情を見ずしてリクツで偽りの男の子の感情を捏造するのは無意味だしアホウだ。しかしこういうヤツはヘタに知識ためこんでたりするので、根拠もなく自信満々なインテリバカで人を見下してかかっているのでタチが悪い。あー高校生ぐらいの私ですな。ダメな私。

要は自分が無いわけです。以上に挙げた二種族は、かたやもう全く自分を持つことを放棄し、自分自身の判断を全く下さずに、その時々にもんなら大勢がするように自分もする。かたや実は無かつたり弱かつたりする自己を他人の思想や言葉でガンガン理論武装してるミノ虫女。他人のセンス横取りしてどこにでもいる凡人のくせに「アタシって変わってるうー」とか信じ込んだりしてるヤツも同類。ひとことと言うと、ケーハクバカと権威主義者（この場合の権威は知識・理論思想から芸術的センスや趣味好みの域まで多岐にわたる）だ。でもちよつと待て。コレはやおい少女に限ったことか？ 違うよな。現代日本の全一般人にも、こういうヤツは腐るほどのだ。

前回の栗原さんの理論で、それはちよつと違うな、と思つたのはこの点である（この点だけなんである）。全一般人がケーハクバカと権威主義者では成り立っていないように、やおい少女だつてそうなのである。栗原さん



のご指摘のとおり、同人界には「王道」と呼ばれるメジャーなジャンルが存在し、「王道」を追随するサークルと読者が多く存在する。人気マンガのパロディを、人気があるという理由で読み描きするヤツらはたしかにいる。しかし、おいらに言わせりゃ、それは本末転倒のケーハクバカのことだ。そもそも人気マンガはなぜ人気マンガなのか？ それは人気があるから人気マンガなのではない。当然。ある程度の人気が出ると人気が人気を呼ぶ、つてことはあると思うが、人気の根本はより多くの人々の心のツボを押した、というその作品自体の威力というもののハズだ。「パロディを作りやすい」か否かつてのものもあるけど、「パロディを作りやすい」つてのも心のツボを押されるといふことと連動している。心のツボを押されるといふのはつまり、胸に迫る説得力とか胸を打つ衝撃とかがあるつてこと、普遍性を持つといふことなのだ。私は現在まさに「王道」であるところのマンガアニメ、「幽遊白書」で同人誌作つてるわけですが、始めた理由は心のツボにこれ以上ないストライクだったからで、自分自身の情念で描いています。「幽遊白書」の直前までは超ドマイナーバンドの同人誌を作っていました。全く表現にメジャーもマイナーも関係ないです。

また、栗原さんの「パロディの元ネタはなぜ子供向けアニメでなくてはいけないのか」という問いと、ご自身の解釈についてですが、やおい少女のツボに来る元ネタは、けっして「子供向け」アニメではありません。「少年向け」アニメであり少年マンガです。もしも「子供向け」アニメであったのなら、「少女向け」アニメや少女マンガも範疇に入らねばなりません。事実上はやおい少女は少女マンガはノーガンチューです。

少女マンガを支持するのはロリコン少年。少女向けではなく少年向けを選ぶ彼女たちの手つきにはある種のフェティッシュがあるわけです。どういうフェティッシュかというと、少年マンガに登場する少年たちが、おしなべて童貞だということです。端的に言う。少年マンガの童貞少年たちは、たまにヒロインとイチヤイチャすることがあるものの、イッてキスどまりで、大抵は女の子よりもスポーツや格闘に夢中。こういう、童貞というより不能であることを少年マンガであるというカセの中で余儀なくされている少年たちといふのは、やおい少女のコンプレックスに抵触することなく、愛らしいものなわけです。だからやおい少女は少年マンガが好きなのだ。栗原さんの指摘は当たっていないと思います。

ともあれ、やおい少女にケーハクバカと権威主義者が一般人における比率よりも多くあるのは否めないと思う。しかしそれは、人はなぜケーハクバカになり権威主義者になるかということの原因と、人はなぜやおい少女になるかという原因とが、単に近接しているために、やおい少女という集団の中でケーハクバカと権威主義者が目立って多くなるということに過ぎない。だからやおい少女⇨ケーハクバカ&権威主義者という公式は正しくはない。

人はなぜケーハクバカになり権威主義者に落ちるのか？ それは、思うに、そうなるに抗うだけの確固たる自己がないからだ。マトモ幻想としての現実ではなく、真実のリアルと対峙する強固な自己がないために、マトモ幻想にノルかソルかになってしまふのだ。

人はなぜやおい少女になるのか。前述と同じだ。私は、やおい少女の世界認識とは、「マトモとはこれこれこういうもの」という世界とそれから疎外される劣性としての自己だと言ったが、そもそもさあ、何で劣性なんだ？ 劣性をその特殊性をタテに優性に美化するのも同じテツだ。また確かに劣性だとしても、何故に劣性を悪しと思ってしまうんだ。何故に劣性なら劣性のまま全肯定し、劣性な

オレ、最高にと思えないのだ。

私はやおい少女の現実認識が間違っているとは思わない。現実はずいぶんマトモ幻想に塗り込められて出現することがまったく多い。身近な現実を思えば、親の目とか近所の目とか職場のバカ上司とかダメ男とか、掃いて捨てるほどマトモ幻想にヤラレちゃってる奴等はいくらだろう。私は、あーもーあんなたちはアリのように働け、キリギリスは冬死にまーす、と言って社会からドロップアウトしてしまったので、そういうマサツとは無縁の人になっちゃってますが、私には自分でソレを頼みに立とうと決意できる程度の才能があったのでそうできただけで、そうする勇気のない人は渋々マトモ幻想の社会に適應するしかないのかもしれないよ。それをムチ打つのもまた強者のゴーマンかもな。

だがしかし、それでも言うなら、私にこの才能を恵んだのはまさに、マトモ幻想の蔓延する世界と、そこから疎外される自己を一度は劣性として認識した絶望的世界認識そのもの

のだったのだ。そういうものに対する反動が無かったのなら、私はペンを握りはしなかつたろう。ありがとうダメな社会、ありがとうダメな自分。一度は孤高をキドつてみたり、そういうあらゆるウヨキヨクセツの末、自分自身をやつと掴んだ自分を知るゆえに、私は全やおい少女の抱える絶望的世界認識にさえ希望を見るのだ。

とゆうわけで、私は一個人として全やおい少女にセツキョーする。やおい少女の現実認識は間違いいではない。むしろ間違っているのは、彼女の自己認識だ。現実を見よ。目前に広がるマトモ幻想としての現実ではなく、自分自身の真実、自分自身の情念を見よ。自分自身の情念で描け、読め！

これはギリギリのことなのだが、自分自身の真実から目をそむけるためのやおいと、自分自身の真実から立脚したやおいと、自分自身は、双方を区別する一線があるのだ。自分自身の真実に立脚してないやおいとゆうのは、同じやおいでも読めばわかるし私は一切興味

がない。さっきの人気ジャンルの話にしても、そのジャンルが人気があるからって同人誌作するようなヤツの作品は、よほどのオリジナリティと才能を持った作家でなければ、自分自身の真実から立脚するやおいになるべくもない。

自分自身の真実に立脚するやおいなんてあるのかね？と思う人がいるなら、ごくごく少数の人の作品ではありますが存在すると言っておこう。彼女たちは他ならぬ自分自身の情念に突き動かされて描いているのだ。ケーハクバカと権威主義者が欠いているのはこの自分自身の真実、情念だ。他人の情念のシリウマに乗ってるのだ。マトモ幻想としての現実の前に、弱者として立つから自分自身の情念を持ってずに他人の情念を追随するハメになるんだ。自ら進んで負け犬となれ。負けるが勝ちって言葉もあるよ。さて負け犬の目から見た世界はビューチフルであります。おわり。



わかってくれとは言わないが、 そんなに俺らが悪いのか？

さすらいのエロマンガ家／玄田生（二八歳／彼女なし）

シヨワジュール三四・三五号に掲載された笹倉尚子氏の文章を読んで愕然とした。同時に、どうしようもないやるせなさに襲われた。本音を言えば、僕は本職がマンガ描きだから、しちめんどくさい文章は書きたくないんだ。しかしまあ、この程度の悪意に満ちたフェミスケの論調はミヤザキ事件以来、引きも切らずあるわけで、可能な限りは反撃していかないと、わしらのささやかな人権すら否定されかねないから、とりあえず書いてみます（ついでにゆつとけば、笹倉氏がいう「困ったオタクキー」には僕のこと含まれているらしいので、個人的な反発もあります。個別にあんた個人に迷惑なんかかけてねえぞ）。

まずね、彼女の文章に関して僕が聞くかぎりでは、明確な「フィクション」が混ざっている。冒頭の「オタクキー」に対する「インタビュール」は、「有害コミック問題を考える会／マンガ部会」の複数のメンバーの発言を作為的に練り上げて構成している（しかも、この文章の中では「ヘテロ男」とされているのに、女性メンバーの発言も組み込まれている）。マンガ部会の一人一人に聞いても、完全にこのよう

な発言をしている人はいないし、発言の内容をかなり誇張して構成している。マスコミの情報操作によく似たやりくちだ。しかもインタビュール当事者に対して、このような形で掲載する旨の了承は一切受けていない。少なくともこの時点で、笹倉氏の文章が信用に値しないものであることは言えると思う。

そのうえで、彼女の展開している「論理」自体にも承服しがたいものがある。そのへんは僕自身のオタク経験から話していったほうがわかりやすかろう。

一口に「オタク」（「オタクキー」とゆー言葉は元グルーヴァーズの西村茂樹氏が「宝島」誌上で使ったのが最初と思われるが、僕の周辺なんか好んで使っていた言葉だ。笹倉氏に使われると、なんかどこぞのオヤヂが「コギャルがなあ」とか知ったかぶってゆつとるような不潔さを感じる）と言ってもいろいろあるわけで、その「コミュニケーション不全」ぶりもさまざまだ。大きく分けたら「対人恐怖型」と「対人願望過剰型」ってことになるんだろーな。僕は完璧な願望過剰。トモダチも欲しい、カノジョも欲しい。なにより万人に「こんな



にナイーブで才能あふれる僕をわかってわかってわかってよお〜ってな具合。どおだ! こんな奴に比べれば、対人恐怖でひきこもるよおなタクちゃんなんてかわいいぞ。……自己卑下してどーする。ううう、とにかくまあ、そんな具合なもんだから、せつかくできた彼女には逃げられるわ、一方的な恋心で暴走するわ、なけなしのプライドもずたぼろになって、そんななかで、とにかく好きにマンガを再び描き始めることで、どおにか他人との距離を意識したコミュニケーションをつくる作業をしている最中だ。

僕がいま主戦場になっているのは、紛れもない「有害コミック」だ。一六〇三二ページのストーリーの中で、とりあえず「お約束」の「まぐわひ」が描かれていれば商品として通用する。しかし、元々が萩尾望都・大島弓子・真崎守・石坂啓・ひかわきょうこ・松苗あけみ……である僕は、案の定このギョーカイでは苦戦している。「理屈っ

ばい」「エッチでない」「絵が汚い」……さんざゆわかれても書き続ける理由は、「男らしくない男のリリシズム」をちゃんと描いてみたい……しかもその読者は僕と同じ自意識過剰の泥沼でもがくあまたの「オタク男」であってほしい……ということなのだ(ちなみに僕の師匠である山本直樹氏は、そんなコトはおくびにも出さず見事な世界を描ききって見せる。ううう、これが天分の差とゆーものなのか?)。

笹倉氏が企画した「女も男も知りたい」「男のセックス」という集会で「フェミフェミしていて、女の男に対するお節介を感じる」と発言したのは僕である。付け足すなら、その際「女も男も」と機械的に倒置して、さも相対化してみせる技法はあきあきだ。男のセックスを女が知りたいとゆーのは、覗き見的な逆セクハラではないのか」とも「しかし現実にごうごうした集会を男が男自身の手で作れないとゆーのは、けっこう情けない現実でもある」とも言った。しつこいようだが、笹倉氏の「提言」なるものは、ほんつとおおおおに大きなお世

話である。セクシユアリティの話をおたくとしてもまったく通じない……とはお笑い草だ。僕は少なくともそーゆー話をしてるぞ。そもそも笹倉氏がフェミ業界とゆー閉じた世界でしか通用しない言語と論理を振りかざして襲いかかってくるような態度でいるから、話もできないんじゃないですか？ 僕だって引いちゃいますよ。

そーゆー話は抜きにして、集会自体は僕にとつてはおもしろつた。萬森樹さんしキム・ミヨンガンさんの「挑発」は非常に魅力的なアプローチだったし、僕が「ペニス以外で感じるよーなセックス」の話に応えた際に「グーグー」といった反応をした男性参加者にいたっては、「なるほど、男にとつて自慢話以外の自分の下ネタは未だにタブーなのね」とゆーことがいまさらわかつて楽しかった（この集会の報告らしき岩本宣明氏の「だからなんだっていうのさ」とゆー文章も三四号に載っていたが、こつちが「だからなんなの？」って感じの駄文でした。毎日新聞の記者だか知らないけど、わかんないことはわかんないって言ったほうが楽だよ。アレはセクシユアリティ云々の問題じゃないよね。それより、彼を引き合いに出したため息なんぞついてみせる笹倉センセイにもあきれましたケド）。萬森さんには憧れるけど、アナタきれいだからそんなことゆえんのよっ！ キーッ」ってなココロのサケビもあったのは事実。

笹倉氏の文章の中で許せなかったのは、もうひとつ。彼女が強調する「生身の女とのセックスを拒否するオタク」という主張である。これがセクシズムでなかったらなんなのだろう。別に「拒否」しているわけではない。都合のいい女を妄想してオナニーにふけるのは、オタクでなくても男のどうしようもない悲しい部分である。でも、それは女だって同じことでしょうか？ 他者との距離をつかめずにもがいているうちに疲れ果て、そのようなニヒリズムにいつちやうような気分つ

てあるじゃん。だったら女の人格に理想を求めず、単なる性欲のけぐちにしてる幾千万のオトコどもの支配するこの世界も肯定しちゃつてよ。そのほうがわかりやすいや。「シャイ・マン」だって？ なんでもかんでもシンドロームにしないでよ。笹倉氏のような人々の理想つてのは、のーみそ筋肉全身キンニクのマッチョマンが嬉々として主夫業や子育てに励んでいるよーな世界なんでしょうか。うげげ、嫌だよ。

ハナシがあつちやこつちや飛んでしまつてすいません。正直僕は、コミュニケーション不全とゆー状態を肯定する気にはなれない。自らの内に閉じこもり、妄想の世界に遊ぶのは、緊急避難ではあれ、それが元で市民社会からバージされても文句は言えないのかもしれない。でも、僕も含めて、オタクは本当に切実に他者とのコミュニケーションを求めて止まず、それができないゆえにもが苦しんでいるのだ。ちやうどウーマンリブが、自身の不全感から始まって、*「Who am I?」*と問いかけながら自らの生を深化させていったのに似た作業を始めなければならぬ。それは少なくとも、お仕着せの「デート実習セラピー」だのカウンセリングだのではないことは明らかだ。

僕ら自身の不全感には、自ら真向かっていく覚悟が必要なのであつて、それができないオタクに関しては、好きでやつてるんだからほつとけばいい。そんな連中がいるのか？ いないからアタシがやつてるんだ！ との笹倉氏の高笑いが聞こえるようだ。僕はいると信じている。少なくともマンガ部会の連中や、僕の支持する一部のエロマンガ家たちは、コミュニケーション不全の状態と必死に格闘している。あとからついてくるオタク・リブリアンもこれから続々と登場してくるだろう。笹倉氏が慌てふためくようなダメ男の逆襲をしてやろうじゃありませんか。

〔付記〕

仕事の合間をぬって書きなぐってしまったので、いまいちショワジールの読者の皆さんには伝わらない文章になってしまったかもしれない。以前書いた文章を補足として送ります。それと、僕が関わっているエロマンガの世界の推薦本と僕自身の仕事のリストを別記しておきます。そのへんの抵抗の少ない方でしたら、ぜひご一読をお願いします。

●推薦

「リバース・モード」千葉治郎（白夜書房）

「LOVE IS ALL」千葉治郎（松文館）

「HEARTACHE」末広雅里（白夜書房）

「エキシビジョン」末広雅里（白夜書房）

「死ぬなミミズ」塔山森（フランス書院）

「お姫様といういろ」塔山森（フランス書院）

「BLUE」山本直樹（弓立社）

「夏の思い出」山本直樹（太田出版）

「フレイクス」山本直樹（シュベール出版）

※他、天竺浪人、うたたねひろゆき、がぁさん、陽気婢……といった作家はお勧め。女性ではあるが、小本田絵夢、南Q太、JONNYも要チェック。

●玄田生作品（現在入手可能分）

「時計仕掛けのせつな」（ビデオ出版刊／「セーラーTEEN」所載）

「タラチネ」（ヒット出版刊／「MOTHER」所載）

「XLIII倫情天使」（ヒット出版「コミックセラフィン」6月号）

「ブラック・ベティ・フラッパー」（ヒット出版「コミックセラフィン」8月号）

「あんすりうむ」（ヒット出版刊／「M—AGE」所載：8／25発売予定）

「えんじのPUNK」（現在執筆中）（10月発売予定・ヒット出版「C—FETISH Vol.2」）

★オタク男の自意識とメンズリブと「有書コミック」

少し前から、この三題噺が僕の主要なテーマになっている。「オタク」論に関しては、著名な「オタク評論家」の多くが実際に見下した態度で「脱・オタク啓蒙」をぶつかナルシステックな「オタク分か礼讃」をくりかえしている状況にうんざりしつつも、自称「フェミニスト」の無理解・男権主義者の暴

力的抑圧・「オタク」自身の自己解放の放棄という四面楚歌の状態においては、多少の弁護とより積極的な評価をせねばなるまい、との思案にいたっている。直接には、件の「幼女連続誘拐殺人事件」に対して疑問符を投げかける集会を企画する過程での思いつきが始まりだった。フェミニストを自称する一部の

輩が、「被告」とされた宮崎勤氏に対して、「大人の男になりきれない未熟な犯罪者」よばわりをする。あるいは、動揺した自称「オタク」が「僕らと彼は違う！」などと言いつくくりかえす。こぞとばかりにマスコミは「異常な文化」と書き立てる。……宮崎氏が犯人であるかも極めて疑わしい状況の中で、「オタク」を語る言説は肥大化していった。

僕自身、一〇〜一八歳の頃に

は典型的なオタク少年だった。ヤマト・ガンダムから「装甲騎兵ボトムズ」「アニメ版みゆき」「とんがり帽子のメモル」といったアニメ作品にいれこみ、セル画を買ったり、好きなマンガを論じること、至福を感じていた。「lala」「花とゆめ」といった少女まんがと「宝島」「ロッキングオン」「朝日ジャーナル」「世界」を発売日に買い込んで読み耽るヘンな高校時代は、今の僕という人間を語る



のに欠かせない。今はアニメなどほとんど観ないし、自分がオタクなのかといえば、まあ一般的にはそうじゃないだろう。

でも「オタクだった自分」のプロセスを経なかったら、僕なんかは典型的な体育会系マッチョ男になっていたんじゃないかと思うし、このトシになってまで過剰な自意識との格闘に悩むような生き方はしてなかったと思う。僕にとつて「オタク男の自意識」を抱え込んでウジウジと悩むことは、まったくの自己正当化でしかないのだが、そうでもしなければ、人格破綻者として抹殺されるか人間のクズとして社会の残飯あさる生を強制されるかしかないのだから、僕としては必死である。

僕は当初、オタクの本質を「社会的「コミュニケーションの

不自由な人」と言い換え、「コンプレックスが解消できずにいる人は誰だってオタク的嗜好を抱えているし、それは積極的に見れば人間的魅力につながる」と論駁していた。それはその後起こった「有害「ミック規制」の問題においても継続して、マンガにおける「性差別表現」という批判を、僅かながら存在する積極的な「性表現」への可能性を持つ作品の紹介といった形で切り返そうと努めた。それは別に、一般的にオタク族を擁護しようとして頑張ったわけではない。「元オタク」が「オタク」をかばうような言い訳はしたくなかったし、なにより大多数のオタクは抑圧なんか感じていないし、自己解放のしんどい闘いよりパソコン画面の美少女と戯れることの快楽に溺れているだ

ろうから。僕はあくまで、少数者としての自己を認識し、どこかにいるだろう共感者と出会うためにそうしていたのだ。

その上で、自分自身は意識的に「エロマンガ家」としてデビューしようとしたし、そうした「オタク解放」の論拠を「男らしくない生き方」を模索する「メンズリップ」というスタンスに求めた。

ところが実際にある「メンズリップ」なる運動の多くは、「男の家事・育児の分担」だの「性差別者・社会的強者としての立場の自己否定」といった、フェミニスト的言説を補完する作業に窮々とする消極的なものでしなく、やっぱりというか「ウジウジと過剰な自意識に悩むオタク男」を救うものではなかった。

「主夫やってます」「育児やってます」とのたまって、おっかないフェミ妻のご機嫌伺いながら妄想の中では力強い己がシンボルで女を屈服させてりゃ、世話ないわ。あいも変わらず、男も女もセクシユアルなナイスバディと自分のSかMの性的嗜好を満たす片割れを求め続けているわけで、どんなに理屈で性差を乗り越えようとしたって、マッチョティシズムに支配される自分の性癖に切り込めないLIVEのLIBERATIONなんて信用できない。

「主夫業・男の育児・買春しない男」で一〇年運動続けている男の顔には、深く刻まれた「認知された男」の印が映る。出発点でしかないところにとどまる人々との共闘は無理だと感じつつも、次のステップを踏み出そ

うとする足先にはもう階段がないことに愕然とする。何より、僕の中で何が「男らしさからの解放」なのか、といういちばん重要な部分が漠然としている。

唐突にイメージしたのは、僕自身の「オタク」していた少年時代の報われず、切ない感情を掘り起こすことだった。

男子高校生Aが好きな女の子の後つけまわして彼女の家の五〇m先の高台から彼女の部屋の明かりを見つめる姿は、一般的には変態だろうが、本人の立場

から言えば、これほど切なくリリカルなシーンはないだろう。惚れられた女の子の立場からすればえらい迷惑だろうが、だからと言ってこの彼女を孕ませて平然としている男子高校生Bがそのトシで積極的にオトコを演

じられることを考えた場合、Aが「変態オタク男」とクラスで陰口を叩かれながらもオトコを演じられないことは、決して責められる筋のものではないんじゃないだろうか？ Aがその後屈折した性意識のもとロリコンエロマンガ家としてデビューし、Bが若手都議会議員として妾を囲いながら「有害コミック規制」に活躍して、Aの作家生命をBが潰していったとしても、AのロリスムとBの男権主義を眺めた場合、僕はあくまでAの立場を支持したい。

たとえばくどいが、僕の考える「メンズリブ」とは、そういう類いのものじゃないかと思っただ。「有害コミック」論争の中で、一部のエロマンガ家が既成の表現とは明らかなセクシユアリティの問題を題材にした作品

を著していることは、あまりとつかほとんど取り上げられることはなかった。山本直樹の作品の多くは、社会と折り合いを付けられないで暴走する過剰な自意識を描いているし、うたたねひろゆき、末広雅里、滝沢ひろゆきといったニューウェーブ作家が、「らしさ」からの脱走を試みながら、切なくも報われない変態行為を執拗に描く姿勢に、かすかなに可能性を感じる。

「性差別表現」と「性表現」の区別と言った時に、表面的な合憲性や夢想的な「理想の関係」をあまたにボルノ妄想に對置することで「有害コミック」問題に言及しようとする「良識派」の守備範囲では、こうした作品のロリスムは到底理解できないだろう。僕がエロマンガを描こうとするのは、自分の中の

「性」と「生」へのこだわりを、さまざまな習作の形でシミュレートしていこうという作業だと考えている。

オタクは屈折し、劣等感を抱いているが故に、それまでの男社会のルールからはみだした倫理を持ちうるのではないか？ そうした倫理を批判的に汲み上げる作業は、果たしてこれまで行われてきたのだろうか？ そう考えた時、僕なりのアブローチというものが見えてきた気がする。「オタク男の自意識」の分析が「メンズリブ」の運動総体を次の局面に向かわせる可能性はある。

「アナルコミックス」

93・8・15より



やおおい論争 「コミケ参上っ」

色川奈緒

8月7日、日曜日。朝8時前

に東京駅に降り立つ私の目の前に、ワラワラと人の波。台車をカラカラと引いている人多し。な、なんだ、民族大移動かいやいや、コミケに向かうやおい少女たちなのだ。

タクシー乗り場は長蛇の列。この暑いのに晴海まで歩いていくなんてやだもんね、しょーがない、最後尾につく。待つこと15分ほど。次から次へとタクシ―がやって来るので、思ったほどは待たなかったけど、タクシ―はみな同じ方向へ向かっているのだった。そう、それは「自然な渋滞」ってやつではない。

「皆さん、同じところへ行かれるんですね、やっぱり」
うーむ、話し好きの運転手に当たってしまった。

「今日は、一年でいちばん大

きなイベントなんでしょ？」

私より事情通かもしれない。突っ込まれても困るんだけどなあ。

「お仕事ですか？」

「は？」

「プロの先生が描いたものは、やっぱり人気が高いそうじゃないですか」

あのおー、そのおー、私は漫画家ではないんですけどおー。

「いや、その、私は参加するのは初めてで……」

以下、アウアウ。

「もういっぱい待ってますよ、門の外に。まだ入れてもらえないんだな、あれは」

「そうですか。売る側の人は、8時半までに来るように言われているんですけど」

「ありやうや、そりや大変だ。間に合うかな。差し障りがあるじゃないけませんね」

続く勘違い。

「大丈夫ですよ。ちょっとぐらい遅れても」

「そうですか。しっかし、暑いんですね。あなたみたいな人は体に気をつけなくちゃいけませんよ。根を詰めすぎるとね、よくないですよ、暑いんだし」

だからあー、私はプロの漫画家さんじゃないんですけどおー。

「今朝はね、池袋で乗せたお客さんを送って東京駅まで来たら、これでしよう。その後、さつきからこの道往復しててね、あたしやー、朝ごはんもまだで。お腹すいちゃったな、もう」

「……すいません」

君のタクシ―に乗った私が悪いのだ、うんうん。

どうにかこうにか到着。ドヒエー、すっこい人。

ハタと気付けば、自分のサー



クルが何館の何番か、すっかりわからない。荷物を宅急便で送るために聞いた番号は、荷造りが終わった時点で捨ててしまった。係の人に聞くしかないな、しかし、係の人はみな殺気だっ

ていて、自分の机がわからない人のことなんて相手にしてくれそうにない。だいいち、みつともないよな。「私はどこに行けばいいんでしょう」なんて、初心者だつてバレバレじゃん。

少し前を歩く絵理子さん（本誌にも執筆してくれている）を発見。周囲から浮きまくる「極道の妻たち風チャイナドレス」を着てくれて、よかつたよかつた。迷子にならずにすんだよ。お。ありがとう。

以後は、彼女をはじめとする経験豊富な皆さまに手とり足とりしてもらおう。みんな、ありがとうね、感謝します。

めえかよ、こんなもん作りやがって」なんて誰かに殴られたらどうしようとかビクビクしつつ（ウソウソ、そんなガラじゃないつす）、ただジーツと客を待つ。

好調なすべりだし。なかなか順調に人が寄っている感じ。そりゃ、人気のある人のところほどじゃ、もちろんないですけど。プログラムにメーカーつけて来てくれた人、模索舎まで探しに行つたと言ってくれた人、バックナンバーが欠けているからと言ってくれた人、噂に聞いてて気になっていたと言ってくれた人、いやあー、みんなありがとう。けっこうな売上げでございましたの。アコギな商売と怒らないで。私の人件費が入つていたのよ。

というわけで、「やおい論争合本」、できました。お問い合わせください方、長い間お待ちください。お申し込みの方は、下記のとおりお申し込みいたします。ギョーカイに精通

している方、噂だけでヤキモキしている人がいるラシイので、ことあるごとに話題に出して広めてください（ずうずうしくて、すいません）。

やおい論争合本 I・II・III

価格 I=800円 II=800円 III=700円

☆購読をご希望の方は、
郵便振替 [] (名義・ショワジュール)
まで、号数・冊数を明記のうえ、送料を含めた代金をお振り込みください。

送料は1冊190円、3冊セットで390円です。

問い合わせ、ご質問・ご意見は
[]
まで。

La VOIX de CHOISIR

◆流川リコ◆

☆いつもCHOOSEIRをありがとございます。集計・結果が楽しみです。

☆笹倉尚子氏の文章は不快すぎで、反論する気すら起きません。ただ、私は「快楽」や「欲望」には本来あるべき正しい姿がある、という考えはいやだし、その姿に近づくことを「解放」と呼ぶこともいやです。人との直接的な触れ合いこそ誰もが求める真のコミュニケーションだ、という考えもいやです。人間はもつと複雑で愉快なものだと思

います。

☆へ注文服ボワレテイカより耳よりのお知らせです。

九月十一日(日)一〇・一〇・一九・〇〇 晴海・東京国際貿易センター西館にて、第一回デザイン・フェスタという催しがあります。

服・小物・絵・オブジェ……を一〇〇〇ブース分の人々が出品します。プロ・アマ・学生・その他、ませこぜです。ボワレテイカも服を出す予定です。注文を優先しているのので、品物が間に合わなかったらごめんなさ

いなのですが、全体として来て損はないと思います。ご来場の際は、ぜひ立ち寄って声をかけてください。今回のテーマはリーターIIマスキュリンです。

(問II)

◆Narihara Akira◆

誰かを好きになる、恋におちる、というのは、不思議なことですよ。本当に愚かしくなる。

その人がいちばん大切であって、その人に何をされても耐えられる、極端な話、命を投げ出したってかまわない、と思う。ふだん、どんなに理屈をこねていようと、好きな人相手では、どうしようもなくなってしまう。馬鹿馬鹿しいような話で。でもそれが、好きである、ということの正体だと思うのです。

三五号における、三四号に対しての皆さんの反響は、ほぼ予想通りでした。ニュアンスや立場の差こそあれ、私もコレは一

通り考えたわ、という意見が載っていた、ということ。ただ、前回の座談会に対しての反応は、掛札さんたちが気の毒だな、と思いました。反論もいつになく苦しいので、ああ、これだけの明確な主張もっている人でも、わかってもらえないのか、誤解されるのか、つまらない中傷を受けるのか、と思うと、暗い気持ちになりました。

掛札さんの主張は、私は女性として(肉体的な意味も含めて)女性が好きで、女性の恋人がいて、その人を大事にしたいと思いい、また、それを普遍的な拡大して、女性全般の力になれるのならば、私のできることなら何でもお手伝いしますよ、ということですよ？

これ、とてもわかりやすく、当たり前前の主張だと思います。好きなひとに対してどこまでも誠実でありたい、ということ、苦しんでいる女性があれば、立場や垣根を越えて、仲間として手を差し延べたい、と思うこと。

それを、夢物語やキラめかしい理想でなく、現実のレベルで上手に処理していくにはどうしたらいいか、みんなで考えましようよ、ということですよ。

こういう考え方の人が、何も考えないで、バイセクシャルの人を攻撃する？

本気で皆さん、そう思いますか？

三四号の座談会で掛札さんが尋ねているのは、バイセクシャルの人の意識と立場です。あれは、決して攻撃ではないと思います。

あそこで彼女が問題にしているのは、男の女も好きである、ということではないでしょう。そのことを、あえて周りに宣言することです。誰に対して、何のためにするのか、ということ。特に、実際に本命の恋人がいる人の場合、相手に対してものすごく失礼ではないの？、ということですが、私は、確かに、こんな失礼なことはないよな、と思います。こういうのって、

喧嘩を売ってるも同然、と思いませんか？ 特に、同性愛者ということで、陰に日向に差別、偏見、圧迫を受けているカップルの場合、信じられるのは周りの人間や社会制度でなく、まず自分と恋人ですから、その相手から「今はおまえが好きだが、明日は知らない。保証の限りではない」と宣言されるのは、いきなり縁切りを言い渡されたようなもの。私だったら、絶望しますよ。何があったの、新しい恋人ができたの、と相手を問いつめます。何か考えているところがあつて、そういうことを言い出したんだらう、と思いますよ。そうは思いませんか？

女性が男性を好きであることは、社会通念の中では常識であつて、特殊な状況下でないかぎり、あえてそれを宣言する人はいませんよね。女性が女性を好きである、ということと違います。愛に男も女も関係ない、という主張は確かにもつともです。でも、その主義主張をする人は、

女性として女性を好きであることの意味、その辛さ苦しさを、真剣に考えたことがあるの？、ただ、頭の中だけで自分に都合のいい理屈としておいているだけじゃないの？、という疑問は私にもあります。

掛札さんの言葉は、そこらへんを、バイセクシャルの人はどうしているのか、もし、ふらついているのであれば、立場はしっかり固めたほうがいいのでは、という問いかけだと思います。ほんやりしていると、望まないような結婚をさせられちゃうよ、踊らされちゃうよ、という。世間様は、とりあえず結婚していれば幸せで一人前だという価値観で人を見るわけですから。確かに私たちが生まれてきたのは、男性と女性の結び付きがあつてのことであるけれども、だからと言って、それを私たちが再度、選択しなければならぬわけではないでしょう。不幸な生い立ちであるなら、なおさら。それに、種々種の事情で、選びたく

ても選べない人も、たくさんいるだろう、と思います。

ここでもう一度、基本的なことを考えてみるべきではないでしょうか？ 人を好きでいること、人と信頼の絆を結ぶっていうのは、どういうことなのか、ということ。

◆ C. J. ◆

初めて送っていただいたのがバイセクシュアル特集で、ちょっと驚きました。私はバイセクシュアルだと思つていたので。これはとつてもフクザツで、読んでいると頭がややこしくなつてきます。

最後のポティノーナさんの「受」とか「攻」とか初めての言葉があつて、ヒエー、マニアック！とびくりしています。これは、ヤオイ方面の方々の言葉なんですよ。すごいですね。私も萩尾望都とかは好きですけど。

これからの号、楽しみにしています。

発行が遅れて、申し訳ありません。

暑かったし、アンケートの集計にモタモタしてだし、
やおい論争合本の作成もしてだし……。そうです、言い
訳です、ごめんなさい。

次号の特集は「夫婦別姓」を予定しています。同封の
アンケートにご協力くださるよう、お願いいたします。
原稿もお待ちしています。自由に書いてくださいね。

また、今号へのご意見・ご感想もお待ちしています。
手紙をくださる方は、掲載していい部分とその際の名前
(ペンネームなど)を明記の上、お送りください。ぜえ
んぶ私信だ、という方は、その旨、明記してくださると
幸いです。

原稿等をお送りくださる方、MS-DOSに変換した
フロッピーを、打ち出しを同封の上、送付してくださる
と、編集作業の上でとーっても助かります。ワープロは
書院なら対応できます。よろしくお願ひします。

締切はアンケートも原稿、手紙も9月末でお願いします。

INFORMATION

◆夫婦別姓時代のこども・「結婚」・お墓◆

◇私たちが求める別姓とは 榊原富士子さん

◇夫婦別姓とお墓 井上治代さん

◇体験的夫婦別姓論 富沢よし子さん

日 時 10月15日(土) 1時30分～4時30分

場 所 阿佐ヶ谷地域区民センター

資料代 500円

CHOISIR 36号

発行年月 1994. 8

編集発行 CHOISIR

郵便振替  (名義：ショワジュール)

年鑑購読代 3000円

★無断断転載および複写、お断り